

明・景泰帝の諡號について (2)

滝 野 邦 雄

②英宗の帰還

陳建（字は廷肇，号は清瀾。廣東東莞の人。弘治十年〔一四九七〕～隆慶元年〔一五六七〕。嘉靖七年〔一五二八〕の舉人）は『皇明歷朝資治通紀（皇明通紀）』（嘉靖三十四年〔一五五五〕陳建序）において、英宗の帰還を記した後に、つぎのように批評する。

謹みて〔以下のように〕按ず。景帝 多難の餘に當り，能く賢に任じ將を選び，南は征し北は距^{こば}み，危きを轉じて安きと爲し，亂るるを易えて治むを爲す。其の功 不細と謂う可し。惟だ英廟を奉迎せんと欲せず。只だ此の一事は大いに是ならず。事 是ならずと雖も，英廟の歸るは，實に此れに由る。何ぞや。蓋し迎えるに意無き者は，乃ち之を迎える所以なり。其の歸るを欲せざる者は，乃ち其の歸るを趣^{うなが}す所以なり。此の意なるや，景帝 之を知らざるなり，一時の廷臣も之を知らざるなり。當時 奉迎に急ならしむれば，則ち彼 必ず以て我の重んずる所は此に在りと爲し，挾み留めて質と爲し，以て中國を愴^{かなし}ます。宋の徽〔宗〕・欽〔宗〕の如きは，迎えるの請 愈々 勤め，而して愈々得可からず。卒に骸を沙漠に委ね，萬世の羞と爲す。惟だ其の君を急とせず，迎えるに意無ければ，彼 以て其の空質を抱きて用無き與^{より}は，曷ぞ之を歸し以て恩を樹つるに若かん。此れ漢の高〔祖〕の分羹の謾語，敵を謬たせて太公の歸るを致す所以なり。是の故に英廟の復歸するは，天なり，人の謀りごとの及ぶ所に非ざるなり。然りと雖も，亦た其の適に會逢するなり，我が國家の氣運の盛なるに値り，胡虜の大志無きなり。五胡の〔前趙の〕劉〔淵〕・〔後趙の〕石〔勒〕，〔金の完顔〕阿骨打，〔元の〕奇渥温（元の太祖，諱は鐵木眞，姓は奇渥温，蒙古部の人）の輩の中國を争いて帝圖と爲すに遇えば，豈に此の如く但だ已まんや。此に於いて我朝の福祚（福分）の隆^{さかん}なるを見るに，前代の超出すること萬萬なり。無疆の休（尽きることのないすばらしいできごと），此に端兆す（『皇明歷朝資治通紀（皇明通紀）』卷之十五・景皇帝紀・「庚午景泰元年八月」条）。

景泰帝は，国事多難にあたり，うまく賢人にまかせ將をえらび，南方は征伐し，北方は防御した。危機を転じて安定したものとし，乱れたものを治まったものにしたのである。その功績は軽微なものではない。しかし，英宗の帰還を求めなかったことは，ほんとうに正しいことではない。ただし，正しくないとはいっても，英宗が帰還できたのは，実際に帰還を求めなかったことによるのである。どういうことなのかといえは，迎える気持がないものは，かえって迎えることになってしまい，帰ってこられることを望まないものは，かえって帰ってくることをうながしてしまうことになるからである。この意味を景泰帝は理解していなかったし，臣下のも

のたちも理解していなかった。当時、帰還を急いでいたならば、こちらの重んじているものはここにあるとして、留めて人質としたままで、こちらを悲しませようとする。宋の徽宗・欽宗の場合は、帰還の要請を熱心に行なうほど、ますます帰還が得られなくなってしまい、ついには沙漠で亡くなってしまった。万世の恥となったのである。ただその君主を救うことを急がず、迎える気持ちがなければ、役に立たない人質を囚えておくよりは、送り返して恩をあたえるほうがよいとなる。これは漢の高祖が羹を分け合おうといて、項羽を誤らせて父を取り返したやり方である。こうしたことからすると英宗の帰還は、天命である。人の謀りごとの及ぶところではない。しかし、それは適切な時期に会合したのである。わが国家の氣運が盛んで、胡虜は大志がなかったのである。五胡の前趙の劉淵・後趙の石勒や金の完顔阿骨打・元の奇渥温などが中国の土地を争っていた時に出会っていたならば、これですんだであらうか。それにつけてもわが国家の福分を見るに、前代をはるかに超越している。尽きることのないすばらしさは、ここに兆しているのである、という。

景泰帝が、英宗の帰還を望まなかったために、かえって帰ることになってしまったというのである。

王世貞も、同じような意見であった。

王世貞 曰く、己巳の役、急ぎて太上を奉迎（恭迎）せざるは、景帝の疵と爲すや。[しかし] 太上の速やかに還るを得る所以の者は、急ぎ迎えざるに由るを知らざるなり。特に訓と爲す可からざるのみ……（『國榷』卷二十九・「代宗景泰元年八月丙戌」条・一八七四頁）。急いで英宗を迎えなかったのは、景泰帝の疵となるであらうか。ただし英宗が速やかに帰還できたのは、急いで迎えようとしなかったことによるのをわかっていないのである。ただこれは教訓とはできないものである、という。

明朝の王世貞も、景泰帝は英宗を囚われの身から解放して迎え入れるのに熱心でなかったと指摘し、かえってそのためにすみやかに帰還できたというのである。

ほんとうに景泰は英宗の返還を求めていなかったということは、『皇明歴朝資治通紀（皇明通紀）』などが伝えるところからも理解できるのではないだろうか。そこにはつぎのようにいう。まず、景泰元年六月に和議を求める使者が来たので、禮部侍郎の李實などを使わした、と記した後に、それに至る経緯を紹介する¹⁾。

1) この事柄は、『實錄』や『國榷』にも記載されている。しかし、『皇明歴朝資治通紀（皇明通紀）』の記述が、それに至る経緯を載せていて状況を理解しやすいため、拙稿では『皇明歴朝資治通紀（皇明通紀）』を用いる。なお、『國榷』では、王直の請願のところから記述する。ただし、景泰帝の様子は同じように記されている。

〔景泰元年六月癸酉朔〕太子太保兼吏部尙書王直 諸大臣を率いて〔以下のように〕言う。上下の神祇陰かに虜の衷を誘わしむ。〔そして〕使 來りて和を請う。臣等 切に惟うに陛下（景泰帝） 大寶もて嗣ぎ登り、天と人と歸し、永永に二無し。陛下（景泰帝）の兄を敬うの心を隆にし、〔英宗を〕尊びて太上皇帝と爲し、天地・宗廟・社稷に告ぐれば、名位 已に定まり、天下の人 皆な以て宜しと爲す。〔だから〕車駕をして虜中より還るを得しめ、太上（英宗）もて尊居せしむるも、〔太上皇（英宗）は〕復た

天に事え民に臨まず。陛下（景泰帝） 但だ當に崇奉（尊崇）の禮を盡せば、即ち天倫（兄弟：『穀梁傳』隱公元年に「兄弟，天倫也」）の厚きを稱さる。伏して望むに虜の請に俯して従い，使を遣りて之に答え，如し果して至誠なれば，即ち別に大臣をして駕を迎えしめんことを，と。上（景泰帝） 曰く，朕（景泰帝）

此の位を貪るに非ず。卿等の強いて樹つるなり。大兄（英兄） 蒙塵し，五たび使を遣るも，虜 聽かず。而して復た紛紜するを何とせん，と。衆 懼る。兵部尚書少保の于謙 旁より對えて曰く，大位已に定まれり。寧ぞ他有らんや。第だ答使もて禮を盡し，目前を紓き，備えを爲すを得るのみ，と。上（景泰帝） 色解けて曰く，汝に従わん，汝に従わん，と。既に出づるに，上（景泰帝） 〔宦官の〕興安をして追問せしめて曰く，即ち虜に使用するは，誰が可なる者ならん。孰れが富弼・文天祥と爲らん，と。王直 聲を厲しくして曰く，孰れが廷臣に非ざらん。孰れが敢えて行かざらん，と（『國權』卷二十九・「代宗景泰元年六月癸酉朔」条・一八五七頁～一八五八頁）。

また、『實錄』では，まず王直などの提案がより詳しく記録されている。

〔景泰元年六月癸酉朔〕 六部都察院等衙門太子太保兼吏部尚書の王直等 〔以下のように〕言う。戎狄の患を爲すは古より之れ有り。惟だ中國に在りては制馭して其の道を盡すのみ。漢の初めて興るに，匈奴強盛にして，高帝 三十萬の衆を以て平城に困しむ。中外 相い救うを得ず。乃ち厚く關氏に遣り，圍みを解き去るを得。其の後，常に入りて寇を爲す。漢 天下の初めて定まり瘡痍（創傷）未だ癒えざるを以て忍びて校（抵抗）せず。武帝の時の「國富兵強」（『戰國策』齊策四）なるに至り，連年北伐し，斬獲 計うるに勝う可からず。匈奴 此れ由り遂に衰え，元〔帝〕・成〔帝〕の間に，單于 降り伏す。唐の太宗の時，突厥 入りて寇し，進みて渭水の便橋に至る。太宗 自から往きて之に臨み，責むるに約に負くを以てす。突厥 恐懼して和を請いて去る。後，亦た常に邊患を爲すも，太宗 毎に之を優容（寛容）にす。其の凶賊に及び乃ち大いに兵を擧げて征伐す。突厥 遂に亡べり。彼れ皆な前に小しく忍び，後に大きく獲る者なり。蓋し時を候いて動くなり。今，國家 承平は日に久しく，醜虜 忽ち寇を為し，太上の蒙塵・軍民の塗炭を思はす。其の禍慘なるや，誠に「與に共に天を戴く可からず」（『禮記』曲禮上「父の讐は，與に共に天を戴かず」）。皇上（景泰帝） 宵衣旰食（政務にはげむ）にして，讐耻を雪がんと欲し，天下の兵を徵して，此の寇を殄たんことを誓う。羣臣・兆姓も同心一力して大功を助成せんとすること有日（多日）なり。茲者，黠虜（狡猾な敵）は自から使を遣りて來りて言うに，上皇（英宗）を送りて京に還し，兵を罷め，戦いを息めんことを請う，と。蓋し上下の神祇 陰かに其の衷を誘いだし，之をして悔悟せしめ，華夷の衆をして此の殺戮を免ぜしめんと欲す。此れ禍を轉じて福と爲すの機なり。伏して望むに皇上（景泰帝） 其の自から新にして俯就するを許し，虜情 亦た使臣を遣りて前み去かしめ，誠に偽なるかを審察し，如し果して至誠なれば，特賜し撫納して太上皇帝を迎奉し以て歸れ。〔そうすれば〕則ち祖宗の心 少しく慰さむ可し。臣等 切に惟うに陛下（景泰帝） 嗣ぎて大寶に登り，天と人と歸し，四方萬國 同心に歡戴して永永に貳 無し。陛下（景泰帝） の兄を隆敬するの心，已に昭かなり。天地・祖宗・社稷に告げて，〔英宗を〕遵びて太上皇帝と為せば，名位 已に定まり，天下の人 皆な以て宜しと為す。今，既に虜中に留寓され，而して歸るも，太上の尊を以て復た天に事え民に臨まず。陛下（景泰帝） 但だ崇奉の禮を盡し，永えに太平悠久の福を享くべし。陛下（景泰帝） 天倫（兄弟：『穀梁傳』隱公元年に「兄弟，天倫也」）に於いて既に厚ければ，則ち天眷 益々隆なり。臣等 猥りに非才を以て叨くも大恩を蒙り，敢て盡くは其の愚を盡さざるにあらず。伏して乞うに聖明 意を垂らして采納せんことを，と（『大明英宗法天立道仁明誠敬昭文憲武至德廣孝睿皇帝實錄』卷之一百九十五・廢帝廟戾王附錄第十三・「景泰元年景泰元年六月癸酉（一日）」条）。

続けて，景泰帝の反応が載せられている。

帝（景泰帝） 曰く，卿等の言う所は，理として當に然るべし。此の大位は私の欲する所に非ず。蓋し天地・祖宗及び宗室・文武の羣臣の爲す所なり。大兄（英兄）の蒙塵してより，朕（景泰帝） 累しば内外の官員を遣ること五次なり。金帛を齎せ虜地に往き，迎え請うなり。〔しかし〕虜 肯て聽從せず。若し今又た人をして往かしめば，恐くは虜 假り駕を送るを以て名と為し，我が使を羈留し，仍お衆を率いて來り京畿を犯さん。〔そして〕愈々蒼生の患を加えん。朕（景泰帝）の意 此の如し。卿等 更に加えて之を詳しくし，後の患を遣す勿れ，と（『大明英宗法天立道仁明誠敬昭文憲武至德廣孝睿皇帝實錄』卷之一百九十五・廢帝廟戾王附錄第十三・「景泰元年景泰元年六月癸酉（一日）」条）。

也先は、和議がなかなか成立しないので、阿剌に文書を書かせ、それを完者脱歡に持たせて、和議を求めてきた。この時には、政務は也先がもっぱら取り行い、その兵も最も多かった。脱脱不花は、可汗であつたけれども、兵はやや少なかった。阿剌の兵はさらに少なかった。君主と臣下が鼎立して、外戚は心では嫉妬するような状態であつた。中国本土に侵略しても、利の多くは也先にとられ、被害だけは均等に受けていた。和議を願つてはいたものの屈服するのを恥じる気持ちがあり、ひそかに阿剌などをやってこさせたのである、という。

〔景泰元年〕六月、北虜の使 來りて和を議すれば、禮部侍郎の李實等を遣りて虜に使いす。是れより先、也先 和議の成らざるを以て、其の知樞密院の阿剌をして書を爲し、參議の完者脱歡を遣りて番文（北方民族の言葉で記した文書）を齎し、京に赴き和を請わしむ。是の時、韃靼の國政は也先 之を専らにし、其の兵 最も多し。脱脱不花 可汗爲りと雖も、兵 稍や少なし。知院の阿剌の兵 又た少なし。君臣 鼎立し、外親（外戚） 内忌（ねたむ）す。其の兵を合わせて南侵するも、利 多くは也先に歸す。而るに弊は均しく受く。和を欲するに及び、屈するを耻ずるの意あり、而して陰かに阿剌等をして來り言わしむ（『皇明歷朝資治通紀（皇明通紀）』卷之十五・景皇帝紀・「庚午景泰元年六月」条）。

これをうけて、禮部は「囚われの太上皇（英宗）を送り返そうとってきているので、それにしたがうべきである」と奏した。その翌日、景泰帝は、文華殿に文武群臣を召してつぎのように言う、「政府としては、和議を結ぶというのは物事を壊すことになると考えられる。そこで交渉を取り止めたいと思う。なのに重ねて提案するのは、どうしてか」と。王直が最初に「太上皇（英宗）が囚われたままです。理屈としてはお迎えすべきです。そこで使者を派遣することをお求めします。後々の悔いにならないようにでございます」と答えた。景泰帝は悦ばず言う「当時の即位は皆が朕（景泰帝）に望んだことである。朕（景泰帝）が頼み込んだわけではない」と。于謙が答えて「帝位はすでに陛下（景泰帝）に定まっております。それをいまさら議論することができるのでしょうか。ただ使いを出し、返禮を尽くし、辺境でのいざこざを除けばよろしいのではないのでしょうか」と。景泰帝の気持ちははじめてやわらぎ、「汝に従わん、汝に従わん」と言う。お言葉が終わり、景泰帝が退き、そして、皆が退出した。

是に於いて禮部 會奏するに、虜 使を遣り〔太上皇（英宗）を〕迎え復さんとす。當に従うべし、と。明日、帝（景泰帝） 文華殿に御し、文武群臣を召して諭して曰く、朝廷 通和（互いに往來して和平を講ずる）するは事を壊すに因り、虜と絶たんと欲す。卿等 累して以て言を爲すは、何ぞや、と。吏部尚書の王直 首に對^{こた}えて謂う、上皇（英宗） 虜に在り。理としては宜しく迎え復すべし。必ず使を遣ることを乞わん。他日の悔い有らしめること勿れ、と。帝（景泰帝） 釋^{はな}ばずして曰く、當時の大位は是れ卿等が朕（景泰帝）に之を爲すを要む。朕（景泰帝）の心に出るに非ず、と。少保の于謙 對^{こた}えて曰く、大位 已に定まれり。孰れが敢えて議すること有らん。但だ答使して禮を盡し、邊患^{のぞか}を紓んと欲するのみ、と。帝（景泰帝）の意 始めて釋きて曰く、汝に従わん、汝に従わん、と。

言^や 已み即ち退く。群臣 出づ (『皇明歴朝資治通紀 (皇明通紀)』卷之十五・景皇帝紀・「庚午景泰元年六月」条)。

こうして、また宦官の興安が景泰帝の旨を伝えてきて、皆は答使となりたいのかという。その上また、だれが交渉に行ってそのまま拘束された文天祥・富弼などのような人になりたいのかとも言う。皆は答えなかった。王直は赤面して、声を激しくして、「どうしてこのように言うのか。今日ここにいる臣はすべて朝廷の人間である。朝廷の人間のみが使者となれるのである。だれがなれないものがあるだろうか」といい、それが二度にも及んだ。興安は何も言えなくなってしまった。こうして李實の官職を進めて禮部左侍郎とし、羅綺を大理右少卿として、正使・副使に任命し行かせた。敕書が下されたものの、そこにはただ答礼を行なえ、とのみあった。太上皇 (英宗) を迎えることには言及がなかった。李實はいぶかしんで、内閣に行き、それを話した。すると興安にそしられて「爾^{なんじ}は敕書に書かれたことを奉ずる使者である。ほかの何に干与しようとするのか」といわれた。そして李實は虜の使者と一緒に出発したという。

太監の興安 復た出でて旨を伝え、呼びて言う、爾等 固より答使ならんと欲するや、と。且つ言う、孰れが行く可き者ならん。孰れが文天祥・富弼 其の人と爲らんや、と。衆未だ答えず。王直 面は赤きを發し、聲を厲^{はげ}しくして曰く、豈に此の如く言う可けんや。今日の群臣は皆な朝廷の人なり。一に惟だ朝廷のみ用いらる。孰れが敢えて用いられざる者有らんや、と。是の如く之を言うこと再びに至る。興安 語塞がる。既にして都給事中の李實を升して禮部左侍郎と爲し、羅綺もて大理右少卿と爲し、正副使に充て以て行かす。敕書 既に下り、則ち惟だ報禮 (報答の禮) せよと言うのみ。迎復に及ばず。[李] 實 驚き訝り、内閣に詣りて之を白す。興安に遇うに^{そし}詔られて曰く、爾 黃紙 (詔書) を奉ずるの幹事なり、他に何を與からんや、と。[李] 實 遂に虜使と偕に北行す (『皇明歴朝資治通紀 (皇明通紀)』卷之十五・景皇帝紀・「庚午景泰元年六月」条)。

このように帰還を求めることに熱心でなかったものの、ついに太上皇 (英宗) の帰還が実現してしまう。いよいよ、太上皇 (英宗) を迎えることになっても、景泰帝はつぎのような態度をとっていた。『實錄』には、

戸科給事中の劉福等言う、今、輜一乗・馬二匹を用い、丹陛 (皇帝) は安定門内に駕して、太上皇帝を迎接す。禮儀 太はだ薄きに似たり、と。帝 曰く、太上皇帝は是れ朕の至親にして、自から虜庭に留まり、宗社 傾危 (傾覆) し、生靈 主無し。彼の時、羣臣 進章し、命を皇太后に請い、天下に詔告し、朕を立てて皇帝と爲し、宗社を保護せんとす。之を辭すること再三なるも、已むを得ず嗣ぎて大位に登れり。已に大兄を尊んで太上皇帝と爲す。[これは] 禮の至極にして以て加うる無し。今、[劉] 福等 奉ずる所の「太はだ薄し」と言うは、未だ其の意の如何なるかを知らず。禮部 其れ會官 (會議) し [劉] 福の言う所を詳しくして以て聞せよ、と。太子太傅禮部尚書の胡濙等 奏すらく、[劉] 福の言う所は皇上 親親の義に篤くせんと欲するに非ざるは無し。[これは] 乃ち臣子

忠を盡すの道なり。初めより別意無し、と。帝　曰く、昨虜營より遁れ歸るの人有りて太上皇帝の書を得るに言う、也失　朕を送り京に回るに、迎接の禮は宜しく簡に従うべし、と。朕　之を遵行す。豈に敢て故さらに違わんや、と（『大明英宗法天立道仁明誠敬昭文憲武至德廣孝睿皇帝實錄』卷之一百九十五・廢帝邸宸王附錄第十三・「景泰元年八月庚辰（九日）」条）。

とある。戸科給事中の劉福などが、輶一乗・馬二匹を用い、景泰帝が安定門の内に駕して、太上皇帝を迎えるという儀礼は、たいへん簡略すぎるのではないかと言う。景泰帝はつぎのようにいう。太上皇帝（英宗）は、至親であり、也先に囚われ、国家が危機に瀕し、人々に主君がない状態になってしまった。その時、群臣が願い出て、皇太后に頼み、天下に布告して、朕（景泰帝）を皇帝とし、国家を保たせるようにした。再三辞退したものの、仕方なしに帝位についたのである。すでに兄の英宗を尊んで太上皇帝の称号をあたえた。これは禮のきわみであり、更に加えるものがない。いま、劉福などが、いう「たいへん簡略である」というのは、どのような意味なのかわからない。禮部で議論して劉福などのいう意味を詳しくして伝えよ、と。太子太傅禮部尚書の胡濙などが、劉福などのいうところは親親の義をさらに厚くして取り行っていたきたいというものであり、臣下の忠を尽くすの道です。もとより他意はありません、と奏する。景泰帝は、昨日也先のところから逃れてきたものがあり、太上皇帝（英宗）の書簡を得ることができた。そこには、北京に帰るにあたっては、迎える禮はつつましいものにしてもらいたいとあった。朕（景泰帝）は、それを遵行した。どうして違うことができるだろうか、というのである。

英宗の帰還にあたって奉迎の儀礼がつつましすぎるのではないかという意見に対して、景泰帝のいいわけである。ここでは、太上皇帝（英宗）がそう伝えてきたからだ、という。

ただし、これは必ずしも景泰帝のいわけだったとは言い切れない。劉定之（字は主靜，号は文安・呆齋・保齋，諡は文安。江西永新の人。明・永樂七年〔一四〇九〕～成化五年〔一四六九〕。正統元年丙辰科（一四三六）一甲三名の進士）の『否泰錄』には、

〔景泰元年八月〕十五日、唐家嶺に駐す。上（景泰帝）内閣掾（學）士の許斌・商輅を遣りて至る。太上（英宗）命じて避位し群臣の迎えるを免ぜよと書かしむ（『否泰錄』一卷）。とある。讓位したままで（復位は願わず）、群臣の迎えも辞退したい、と英宗は伝えていたという。『北征事蹟』には、八月十三日に掛けているが、

〔景泰元年八月十三日〕商輅・王謙・許彬 接到する有り。朝見 畢りし後、上（英宗）臣（袁彬）をして許彬等に〔以下のように〕宣せしむ。「上（英宗）〔北方に〕到れば、我家の祖宗社稷の爲に^{ため}着して^{なんじ}恁ら官人に毎に多く心を費やし憂念（憂慮）せしむ。我 如今幸いに回還して京に到るの時を得。〔そこで〕退居（謂退位移居）閒處（僻靜的處所）せんことを情願（願望）す。你^{なんじ} 便^かし書を寫き御弟皇帝に與えて知道（了承）させよ」と説え、と（『北征事蹟』一卷・十一葉）。

という。北京にもどったら讓位して静かに過ごしたいと伝えたという

こうした記録によったのかもしれないが、『皇明歴朝資治通紀（皇明通紀）』にも、

〔景泰元年八月〕十五日，上皇（英宗） 唐家嶺に至り，使を遣りて京に回る。詰諭して位を避け，群臣の迎えを免ず（『皇明歴朝資治通紀（皇明通紀）』 卷之十五・景皇帝紀・「庚午景泰元年八月」条）。

とある。

また、『國權』にも，八月十二日に英宗がつぎのような草詔を伝えてきたという。

上皇（英宗） 宣府の行殿（移動式の宮殿）に駐す。少卿の許彬 駕を迎え至る。遂に〔許彬に草詔を命じて文武羣臣に諭して曰く，朕の不明にして，權奸（奸臣）に蔽われ，虜廷に留めらる。嘗て書を朕の弟に寓しての皇帝の位を嗣がしむ。幸いに天地祖宗の靈，母后皇帝 憫念の切もて，虜をして過を悔い，朕を送りて京に還さしむ。郊社宗廟の禮・大事既に預かる可からず。國家の機務は，朕が弟 惟だ宜しくす。^{なんじ}爾 文武羣臣 務めて心を悉し以て其の逮ばずを匡せ。朕 京に到るの日，迎接の禮は，悉く簡略に従え。仍お〔許彬に命じ諭して土木の陣に亡くなる吏卒を祭らしむ（『國權』 卷二十九・「代宗景泰元年八月癸未（十二日）」条・一八七二頁）。

上皇（英宗）が宣府に到着した。許彬がお迎えに出た。そして、英宗は許彬に「朕（英宗）は、物事を見通す力がなく、奸臣にだまされて、捕虜となってしまった。すでに朕（英宗）の弟の景泰帝に書を送って帝位を継せた。幸いにも天地祖宗の靈，母后皇帝のあわれみの切なるおかげで，虜が過ちを悔い，朕（英宗）を北京に送り届けてくれることになった。国家の大札や大事にはもはやあずかることはできない。国家の政務は朕（英宗）の弟の景泰帝がよくしている。お前たち文武群臣は務めて心をつくし，その足りないところを正すようにせよ。朕（英宗）の北京に到着する日の，奉迎の儀礼は，すべて簡略にせよ」という草詔を出した。そして，許彬に土木堡で亡くなった官吏や士卒を祭らせた，という。

この記述によると，簡略にするように命じたのは英宗自身となる。『實錄』には，この記事は見当たらない。ただ，八月九日に掛けて，許彬を迎えに行かせたとのみ記される。

〔景泰元年八月庚辰（九日）〕遣太常寺少卿の許彬を遣りて宣府に往き，太上皇帝を奉迎せしむ（『大明英宗法天立道仁明誠敬昭文憲武至德廣孝睿皇帝實錄』 卷之一百九十五・廢帝郕戾王附錄第十三・「景泰元年八月庚辰（九日）」条）。

さて，太上皇（英宗）が北京に到着する直前の八月十二日には，諸臣の間に唐の肅宗が上皇の玄宗を迎えた故事を記した書付が出現する。もっと丁寧な太上皇英宗を奉迎すべきであるという意味であろう。それに対しても，景泰帝は治安の問題を持ち出し，自分の考えを押しとおそうとする。

〔景泰元年八月〕癸未（十二日），禮科給事中の于泰等 言う，今日早朝退くに，侯伯・尚書・都御史等の官の石亨・王直・胡濙等於午門の前に有りて，一帖を持す。羣立聚りて觀るに

議論一ならず。俱に各々散去す。帖を將^もつて隱匿す。法として當に追究すべし、と。帝曰く、各官多く係れ祖宗の舊臣なり。如何ぞ事情を隱匿せん、と。王直・胡濙 即ち實情を將^もつて具聞す。[王] 直等 奏すらく、帖は實に工部尚書兼翰林院學士の高穀の處より接來す。[そこには] 唐の肅宗の上皇を迎接するの故事を備載す、と。帝 曰く、朝廷大いに言路を開けり。高穀は是れ大臣なり。唐の肅宗の故事もてし、何ぞ明らかに言わず。必ず異情有らん、と。[胡] 濙等 奏すらく、唐の肅宗の上皇を迎接するの故事は、正に今日效う可きの良規なり。皇上 宜しく法駕を備え、安定門外に至り、公侯駙馬伯五府六部等の衙門もて分官して龍虎臺に至らしめ、文武百官并せて監生・順天府の耆老・生員人等もて土城外に至らしめ、迎接して禮を行なえ。凡そ此の數者なれば、舊に視^{くら}べて禮儀を定むること重きを加う、と。帝 曰く、虜人 譎詐あり。未だ盡く信ず可からず。大禮を備えて遠接せんと欲すれば、恐らく賊の計に墮らん。故に止だ車馬を用いて遠迎す。但だ大兄入城するを得れば、宗社の奠安・親親の尊讓の禮は[以下のように] 朕 自から處置す。今、太上皇帝の車駕 東安門に入れば、朕 門内に於いて迎接し、叩頭を行なわん。禮 畢れば、朕 文武百官と^{とも}に隨いて南城內便殿に至り、太上皇帝 升座し、朕の行禮 畢れば、文武百官 行禮せよ。卿等 悉く朕の命に遵え。再び紛更するを許さず、と(『大明英宗法天立道仁明誠敬昭文憲武至德廣孝睿皇帝實錄』卷之一百九十五・廢帝郕戾王附錄第十三・「景泰元年八月癸未」条)。

八月十二日に于泰などが、「今日退朝する時、石亨・王直・胡濙らが午門の前で一枚の書付を持っておりました。それを見て議論したのですが定まらず、それぞれ帰りました。書付は隱匿されてしまいました。お調べいただければ」という。景泰帝は、「お前たちはもとの臣である、どうして事実を隱匿するのか」という。そこで王直・胡濙は事情を説明した。王直がいうには、「書付は高穀のところからまいりました。そこには、安史の乱の後、唐の肅宗が上皇の玄宗を迎えた故事が記されておりました」と。景泰帝は、「宮中ではおおいに言路を開いているし、高穀は大臣である。唐の肅宗の故事など持ち出さずにどうしてはっきりと言わないのか。何か異なる事情があるのか」という。胡濙などは、「唐の肅宗が上皇の玄宗を迎えた故事は、まさしくいま見習うべきものです。皇上(景泰帝)は、駕を整えて、安定門の外にお出ましになり、公侯駙馬伯五府六部等の衙門のものは分かれて龍虎臺に行き、文武百官や監生、順天府の耆老・生員などは、土城(德勝門の外)に行かせて、奉迎して儀礼を行なっていただきたい。このようになされば、他のものに比べて儀礼は丁寧になります」という。すると、景泰帝は、「虜の姦計は、すべて信用できない。盛大な礼儀を整えて遠くまで奉迎しようとするれば、敵の計略に陥るだろう。そのため車馬を整えて用いて遠くまでお迎えしないのである。ただ兄の英宗が北京城内にお入りになることができれば、宗社の奠安・親親の尊讓の禮は以下のように朕(景泰帝)自身で処置したい。[それは] いま、太上皇帝(英宗)の車駕が東安門に入れば、門内で朕(景泰帝)が奉迎し、叩頭を行なう。その礼が終われば、朕(景泰帝)は文武百官とともに太上皇

帝（英宗）にしたがって南城内便殿に行く。太上皇帝（英宗）が着座され、朕（景泰帝）の礼が終われば、文武百官が礼を行なうというものである。すべて朕（景泰帝）の命令どおりにせよ。これ以上紛糾するな」という。

『國權』にも同様のことが載せられていて、もう少し詳しくのべられている。そこには、つぎのようにある。

癸未（十二日）、朝して退くに、諸大臣 一つの無名の書を得。聚りて之を觀るに、書上に修史先生とあり、其の名を隱し、[以下のように] 言う。都人 一たび駕の旋るを聞き、人人 喜躍し、之に近づくも厭わず。遠望して知る可し。今日、宜しく主上（景泰帝）に奉迎するの禮を厚くし、避位（讓位）の婉辭ありて、然る後に命を受くを請うべしとす。因りて唐の肅宗の故事を述ぶ、と。諸臣 曰く、若し封して進めれば、或いは上（景泰帝）の心を感じ動かす可し、と。胡濙 以て同官の王直に語げて曰く、禮 失いて、諸を野に求むと謂う可し、と。王文 曰く、不可なり。匿名の書もて以て告ぐを得ず、と。[しかし] 禮科給事中の于泰 以て聞す。上（景泰帝） [胡] 濙に何れより書を得たるかと詰す。[胡] 濙 言う、臣 之を高穀に得、と。上（景泰帝） 怒り、按ずるを命じて其の人を捕う。高穀 曰く、臣 隸道に之を拾う、と。千戸の龔遂榮 出でて承して曰く、臣 之を爲す、と。胡濙 因りて奏するに、唐の天寶の亂に玄宗 蜀に幸し、肅宗 靈武に即位し、玄宗を尊んで太上皇帝と爲す。肅宗 兩京を收復し、上皇を迎え還す。咸陽に至り、法駕（天子の車駕）を望賢樓に備う。上皇は宮南樓に在り。肅宗は紫袍を著し、樓の下に馬もて趨進し望む。上皇 樓を下り、肅宗を拊^なでて泣き、黄袍を辭し、自ら肅宗の爲に之を着す。肅宗 地に伏して頓首して固辭す。上皇 曰く、天下の人心 皆な汝に歸す。朕をして餘齡を保養するを得さしめるは、汝の孝なり、と。肅宗 乃ち受く。此れ已に行なわれるの令典なり。政 之が良規に效う可し。今、法駕（天子の車駕）を安定門内に備うるは、誠に太はだ簡と爲す、と。上（景泰帝） 曰く、虜の詐に墮いるを慮る、故に其の禮を簡にす。但だ大兄 入城するに、朕は親を尊ぶを知る。朕は今 太上皇を東安門内に迎え、叩首畢れば、羣臣を率いて從いて南城内便殿に至り、太上皇を座に升し、朕 行禮畢りて、羣臣 皆な朝す。再び紛更すること母れ、と。遂に[胡] 濙を獄に下す。會たま赦あるも、猶お之を杖す（『國權』 卷二十九・「代宗景泰元年八月癸未（十二日）」条・一八七一頁～一八七二頁）。

八月十二日に于泰などが退朝しようとする、と、諸大臣は一通の無署名の書を得た。集まってそれを見ると、修史先生とあり名前を隱し、つぎのように書かれていた。都の人たちは、太上皇帝（英宗）のお帰りになるを聞いて、喜び、近づくことも厭わない。このことは遠くから見てもわかるのである。いま、主上（景泰帝）には、太上皇帝（英宗）をお迎えする儀礼を手厚くして、太上皇帝（英宗）への讓位を婉曲に伝え、その後に景泰帝の即位の命を受けるようお願い申し上げます。そこで、唐の肅宗の故事を申します、とあった。諸臣は、もしも提出すれば、

上（景泰帝）のお心を感じ動かすことができるのではないか、という。胡濙は同僚の王直に語って、「こうした礼儀は失われてしまって、在野に求めるだけになった」という。王文は、「不可である。匿名の書を提出できない」という。ところが、于泰が景泰帝に伝えてしまう。景泰帝は、「胡濙はどこからこの書を得たのか」と質した。胡濙は、「私はこれを高穀から得ました」という。景泰帝は怒り、罪を調べるために其の人をとらえさせた。高穀は、「この書を隸道に拾いました」と答える。千戸の龔遂榮が、申し出て、自分が行なった、という。そこで、胡濙は、奏して「唐の安史の乱の時、玄宗は蜀に御幸し、肅宗は靈武に即位して、玄宗皇帝を太上皇帝としました。肅宗はふたつの都を回復した後、上皇（玄宗）を奉迎することになりました。上皇（玄宗）が咸陽に到着した時に、望賢樓に法駕（天子の車駕）を備えました。上皇（玄宗）は宮南樓にいて、肅宗は紫袍を着て、宮南樓の下まで馬で進み、上皇（玄宗）を拝しました。上皇（玄宗）は宮南樓より降りて、肅宗を撫でて泣き、皇帝の着る黄袍を辞退して、みずから肅宗にそれを着せました。肅宗は、地に伏したままで頓首して固辞しました。上皇（玄宗）は、天下の人心はすべて肅宗に帰している、自分に残りの人生を保養させるのが、肅宗の孝行である、と述べ、ようやく肅宗はそれを受け入れた、といいます。これは、すでに行なわれたすばらしい儀礼です。政治は、すぐれた先例を見習うべきです。いま、法駕（天子の車駕）を安定門の内に備えるというのは、まことに簡略です」という。景泰帝は、「虜の計略に陥るのを慮って儀礼を簡略にした。いま兄の太上皇（英宗）が帰還されるのにあたって、親を尊ぶということは理解している。朕（景泰帝）が太上皇帝（英宗）の車駕を東安門内にお迎えし、叩首の礼が終われば、群臣とともに太上皇帝（英宗）にしたがって南城內便殿に行く。太上皇帝（英宗）に着座していただき、朕（景泰帝）の礼が終われば、文武百官が朝する、というようにせよ。ふたたび紛糾するな」という。そして、胡濙を獄に下した。ちょうど大赦にあたったが、杖刑は行なわれた、という。

陳建の『皇明歴朝資治通紀（皇明通紀）』は、つぎのようにいう。

千戸の龔遂榮を詔獄に下す。時に上皇（英宗）已に塞に入るも、朝廷 猶お虜情 許多きを以て疑いを爲す。禮部 連日會し奏議するも迎禮 未だ定まらず。〔龔〕遂榮 書を學士の高穀に^{いた}寓し、奉迎は當に厚きに從うべしと言う。大意に謂えらく、上皇（英宗）の出るは 游畋（遊びや狩り）の益無きに非ず、宗社の計と爲すのみ。今、都人 一たび駕の還るを聞き、喜躍せざるは無し、則ち人心 尚お未だ上皇（英宗）を厭わざるなり。今日の奉迎、禮は當に厚きに從うべし。主上（景泰帝） 位を避け懇辭し、而して後に命を受けば乃ち可なり。然らざれば。恐らくは千載の史書 洗い難し、と。〔高〕穀 其の書を袖にして入朝し、以て廷臣に示して曰く、武夫 尚お此の禮を知る、況や儒臣をや、と。王直 曰く、此の禮 失われて之を野に求むのみ、と。胡濙 封して進めんと欲し、朝野の情を同じくするを見し、^{しめ}以て上（景泰帝）の心を感動させんことを庶わんとす。都御史の王文 之を止む。陳循 之を見て^{いか}悲ること甚だしく、〔龔〕遂榮は分に非ずと言い、其

の罪を治めんことを請い、遂に錦衣衛の獄に下す。尋いで赦に會し、釋さるるを得（『皇明歴朝資治通紀（皇明通紀）』卷之十五・景皇帝紀・「庚午 景泰元年八月」条）。

千戸の龔遂榮を詔獄（天子の詔を奉じて行なう裁判）に下した。時に、上皇（英宗）は中国にもどってこられたが、朝廷では、虜はいつわりが多いことから疑っていた。禮部では連日会して提案するものの、奉迎の儀礼はまだ決まらなかった。龔遂榮は、書を學士の高穀に送って、奉迎の儀礼は手厚くすべきであると述べた。その書の大意は、上皇（英宗）がお出かけになってしまった（囚われてしまった）のは、遊びや狩りという人々に益のないことをなさったのではなく、国家の計のためであります。いま、都の人たちは、太上皇帝（英宗）のお帰りになるを聞いて、たいへん喜んでおります。それは、人々が太上皇帝（英宗）を嫌っていないからです。いまの奉迎の儀礼は手厚くすべきです。そして主上（景泰帝）が天子の位を譲り、ねんごろに話して、その後に即位の命を受ければよいのです。そうでなければ、千載の史書の汚名は洗い流せません、というものであった。高穀は、その書を袖に入れて宮殿に行き、諸臣に示して、武官ですらなおこうした礼儀を知っております。ひるがえって儒臣ではどうでしょうか、という。王直は、こうした礼儀は失われてしまって、在野に求めるだけになった、という。胡濙は景泰帝に提出しようとした。そして朝野の英宗に対する気持ちが同じであることを示し、景泰帝の心を動かそうと願った。しかし、都御史の王文がそれを止めた。陳循はこの書を見て、たいへん怒り、龔遂榮は分に過ぎたことをしたといい、処罰を求め、ついに錦衣衛の獄に下した。その後、大赦にあい、ゆるされた、という。

『皇明歴朝資治通紀（皇明通紀）』の編者の陳建は、これに続けてつぎのように意見を加える。

按ずるに、龔氏（龔遂榮）の此の書は、一時の正論、萬世の不磨（消し去ることができない）なり。意わず武弁の中に此の奇士有るを。〔王〕文・〔陳〕循の輩は乃ち此の如きの舉措を作す、視（あつかまし）き面目有り。如何んぞ善く終わらん、と（『皇明歴朝資治通紀（皇明通紀）』卷之十五・景皇帝紀・「庚午 景泰元年八月」条）。

龔遂榮の書簡は、当時の正論であり、万世不滅のものである。武官にこのような奇士がいたということは、思いもよらなかったことである。その書簡に対する王文・陳循がこのような行為を行なったことは、厚かましいといえる。どうして善い終わり方があろうか、という。

こうしたことからすると、帰還した太上皇帝（英宗）の取り扱いには、当初から、いろいろと意見があったことが分かるのではないだろうか。

『否泰録』は、到着の様子をつぎのように伝える。

〔景泰元年八月〕十六日、東安門より入る。上（景泰帝） 迎え拜し、太上（英宗）も答拜す。〔そして〕相い抱きて哭す。各々授受の意を述ぶ。推遜 良や久しく、送りて南内に至る。

群臣 就き見て退く。天下に大赦す。生成 欣欣焉とする有り（『否泰録』一卷）。

十六日に太上皇帝（英宗）は、安定門から入城された。景泰帝は、迎え拜された。太上皇帝（英宗）も答礼された。そして、抱き合って泣き、それぞれが天子の位を譲りあったという。譲り

合いがしばらく続き、太上皇帝（英宗）を南宮にお送りした。群臣はそれを見て下がった。そして天下に大赦した。人々は、喜びあった、という。

また、この史料に基づいたのかもしれないが、『皇明歴朝資治通紀（皇明通紀）』は、つぎのように記す。

〔景泰元年八月〕十五日、上皇（英宗） 唐家嶺に至る。〔そして〕使を遣りて京に回し、詰諭して位を避け、群臣の迎えを免ず、とす。十六日、百官 安定門に迎う。上皇（英宗） 安定門より入る。今上（景泰帝） 迎え拜し、上皇（英宗） 答拜す。拜 畢り、相い互いに抱き持して哭し、各々授受の意を述ぶ。推遜 良や久しく、乃ち上皇（英宗）を送りて南宮に至る。群臣 就き見て退く。天下に大赦す（『皇明歴朝資治通紀（皇明通紀）』巻之十五・景皇帝紀・「庚午景泰元年八月」条）。

十五日に太上皇帝（英宗）は唐家嶺に到着された。そして、使いを北京に寄越されて「皇帝の位を譲り、群臣の出迎えを免ず、と伝えてこられた。十六日に群臣は、安定門にお出迎えし、太上皇帝（英宗）はそこから入城された。景泰帝は迎え拜された。拝礼が終わり、抱き合って泣き、それぞれが天子の位を譲りあったという。譲り合いがしばらく続き、太上皇帝（英宗）を南宮にお送りした。群臣はそれを見て下がった。そして天下に大赦した、という。

さらに『國権』も北京帰還を十五日に掛けてつぎのようにいう。

丙戌（十五日）、上皇（英宗） 京に還り、東安門に至る。胡騎 猶お簾を掲げて視候す。上（景泰帝） 迎えて門内に拜す。上皇 下馬して相い持して泣く。各々位を遜るの意を述ぶ。良や久しくして、南宮に入る。羣臣 隨いて見ゆるを請う。〔それに対して〕敕して曰く、重ねて眇躬（皇帝の自稱）は國を辱しめ師を喪うを以て、宗廟に玷有り、又た何の顔ありて羣臣に見えんや、と。許さず（『國権』 卷二十九・「代宗景泰元年八月丙戌」条・一八七三頁）。

十五日に太上皇帝（英宗）は北京にお帰りになり、東安門に到着された。胡の騎兵が御簾を上げさせて見張っていた。景泰帝は、お迎えして東安門で拝礼を行なわれた。太上皇帝（英宗）は馬から降りて、抱き合って泣き、お互いが天子の位を譲りあった。しばらくして、南宮にお入りになった。そして群臣が拜謁を願い出ると、太上皇帝（英宗）は、これまでの経緯から、宗廟に玷をつけてしまったので、どのような顔で皆に謁見できるのかといい、群臣の拜謁を断ったと記している。『國権』では、太上皇帝（英宗）の意向で群臣の拜謁を断ったとするのである。

いずれにせよ、太上皇帝（英宗）の帰還が実現すると、景泰帝はつぎのような詔を出し、天下に大赦した。

〔景泰元年八月〕庚寅（十九日）、太上皇帝の京に還るを以て、寧陽侯の陳懋・安遠侯の柳溥・駙馬都尉の焦敬・石璟を遣りて天地・宗廟・社稷・山川の神に祭告し、遂に詔を頒し天下に大赦す。詔して曰く、朕は、先帝聖體（先の皇帝）の遺を奉ず。適たま國家中衰の運に値り、幾務 權倖（奸佞の人物）に擅專（獨斷專行）され、大兄を誤り虜庭に陥いる

に致すを痛む。天地祖宗の眷佑するの隆に頼り、母后・臣民の付託するの重きを荷い、朕に大位を授け、鴻圖（王業）を紹けしめ、人心を慰安（安撫）し、宗祀を奉承さす。神器（政權・国家）保つ可きこと有りと雖も、王業以て多難（難）なるを奈せん。夷虜の内に侵し、蠻苗の外に擾るは、方に茲に攘除（驅除）已に定まるも、尚猶お宵旰（政務）に寧ずる靡し。顧だ滅賊の威さし難し。思うに誠を以てしても怨みを懷けり。[そこで] 肆めて屢しば人を遣り、重齋（多くの禮物）・金帛、虜の好む所を投じ、大兄を迎え復さんとす。[しかし] 頑梗（頑迷）にして倭めざるを奈せん。豈に怨讎（仇敵）の匿す可けんや。方に大舉を圖れば、遽かに見て彰かに聞き、逆虜心を革め、翻然と畏服す。乃ち今年七月より以來、其の親信（親近の信任する人）を遣り、伏して朝貢を關き、固く講和を請うこと、再三に至る。悔辭に見われ、款過に浮く。朕已むを得ず親の為に屈し、厚く金帛を加え、使を選びて偕に行かしむ。敢て「徳は天を動かす可し、信誠より能く暴を化す」と謂う。八月十五日、其の太師也先果して五百餘騎を遣りて大兄を奉送（護送）して京に還す。臣庶交ごも懼ぶ、宮庭胥な慶す。然れども朕即位の初め、已に嘗て祇みて天地宗社に告げ、大兄に尊號を上つりて「太上皇帝」と曰う。禮に「惟だ隆くして替うる無き有り」（管見の及ぶところでは、『續資治通鑑長編』卷二百三十五・「神宗熙寧五年秋七月」条に引用する郭逢原の疏文に「古者、天子尊師之禮、惟有隆而無替、君臣分有時而不行」とある）と。義は當に卑きを以て尊ときを奉るべし。[しかし] 未だ復怨（復仇）の私を酬わず、[そこで] 姑く倫を厚くするの願いを遂げるを少くと雖も、爰に恩典（恩恵）を稱して、薄く臣民に及ぼさん。所有ゆる寛恤（寛大にする）するの事宜、後に條列す。[……] 於戲、雪恥は威を以てせずして徳を以てす。誠に宗社の靈に仗る有りて、民に勞せず、安んずるを遣り、志は邦家の福を益すに在り。尚お叔祖・叔父・羣臣・賢哲に頼り、朕躬（我身）の逮ばざるを匡せ。華夏（中土）・蠻貊（辺境）、四方・遠邇（遠近）、治效を無窮に臻さんことを庶幾う。中外に布告し、咸な朕の懷いを體せよ、と（『大明英宗法天立道仁明誠敬昭文憲武至德廣孝睿皇帝實錄』卷之一百九十五・廢帝郕戾王附錄第十三・「景泰元年八月庚寅」条）。

景泰元年八月十九日、太上皇帝（英宗）が北京に帰還することになり、寧陽侯の陳懋・安遠侯の柳溥・駙馬都尉の焦敬・石璟を派遣して天地・宗廟・社稷・山川の神に祭告し、詔を發布し天下に大赦する。そして以下のように詔する。朕（景泰帝）は先の皇帝（宣宗宣德帝）の委嘱を奉っていたところ、国家の中途に衰える時期に遭遇した。また、奸佞の人物が政治を独断専行し、大兄（英宗）を誤って虜の捕虜にさせてしまった状況を痛んでいた。そうしたところ天地祖先が目をかけてくださったうえに、皇太后・臣民の委託の重きを荷い、朕（景泰帝）に帝位を授け、王業を継がせ、人心を慰め、祭祀を継承させるようにさせてくださった。神器（政權・国家）は保つべきであるといっても、国家が多くの困難に瀕していることをどうすべきであらうか。夷虜の侵略と、蠻苗の反乱はここによりやく取り除くことが定まったが、政務は休

まる時がない。ただ滅ぼした賊を完璧に屈服させることは難しい。誠をもって接しても恨みを抱き続けるものである。そのため、きわめてしばしば人を遣り、たくさんの礼物・金帛といった虜の好みそうなものを投げあたえ、大兄（英宗）を取り返そうとした。しかし、頑迷で改めようとしないうのをどうすればよいのか。また、仇敵をとり逃がしてもよいのだろうか。そこで大挙して軍を起そうとしたところ、急ぎ見て噂を聞きつけ、虜は心を改め、にわかに畏れ服従した。すなわち今年七月より以来、近臣を寄越して、朝貢を行ない、固く和議を願い出ること再三にわたった。悔恨はことばにあらわれ、懇願する気持ちはあふれ出ている。朕（景泰帝）はやむをえず近親のために屈して、厚く金帛を持たせて、使者を扨んで一緒に行かせた。あえていうならば「徳は天を動かす可し、信誠より能く暴を化す」というものである。八月十五日に、也先が五百騎あまりをつけて北京に大兄（英宗）を送り届けてきた。臣民いっしょになって喜び、宮中も全員が慶んだ。しかし朕（景泰帝）は即位の最初につつしんで天地宗社に告げ、大兄（英宗）に尊號をたてまつり、太上皇帝としたのである。また、禮に「惟だ隆くして替うる無し（至尊であって〔何ものにも〕替えがたい）」とある。義としては〔地位の〕卑いもの（景泰帝）が〔地位の〕尊^{たか}いもの（英宗）を奉ずるべきであるが、まだ復讐を遂げていない。そこで、しばらくは肉親を厚遇することを行なえないのであるが、ここに恩典を施して、あらゆるところにおよぼしたい。すべての恩典は以下で述べるとおりである。[……恩典を具体的に列挙する……] ああ、恥をはらすというのは、威圧を以てするのではなく徳をもってするものである。まことに国家のみたまにお頼りして、民を勞せず、安んずることを与えたい。願いは国家の福をふやすことである。なお叔祖・叔父・群臣・賢者などに頼って朕（景泰帝）の至らないところは、ただしてもらいたいと思う。そして、中国や辺境や四方遠近あらゆる遠近に治世の果てしなさをとどけられるよう願う。中外に布告して、皆に朕（景泰帝）のおもいを体認させるように、という。

さすがに、この詔にはなんと景泰帝のわだかまった気持ちは直截的には、示されていないように見える。

ただ、帰還した太上皇（英宗）が落ち着いた南内について、英宗から百年あまり後の沈德符（字は景倩、又の字は虎臣、号は景伯・清權堂・敝帚軒・甕汲軒。浙江嘉興の人。明・萬曆六年〔一五七八〕～明・崇禎十五年〔一六四二〕。萬曆四十六年〔一六一八〕の舉人）が、『萬曆野獲編』で、つぎのように述べている。

[南内] 余（沈德符）曾て南内に遊ぶ。禁城外の巽（東南）の隅に在り。亦た首門・二門有り、以て兩つの掖門（宮殿正門の兩脇の門）に及ぶ。即ち景泰の時の英宗を錮（とじこめる）の處なり。稱する所の小南城なる者 是れなり。二門の内に亦た前後の兩殿有り。體を具えて而して微なり（『孟子』公孫丑上：全体を備えているものの規模が小さい）。旁に兩廡有り。太上（英宗）を奉ずる所以の者は止だ此れなり。其の他の離宮以て圓殿・石橋に及ぶまで、皆な復辟の後の天順の間に増飾する所の者なり。初制に非ざるなり。之を老中官（宦

官)に聞くに、特に室宇(房間) 湫隘(狹小)のみならず、侍衛も寂寥たり。即ち膳羞(美味の食品) 竇(門の傍の小戸)より入るも、亦た時には具わらず。并せて紙筆 多く給せられず。其の外人と謀議を通ずるを慮ればなり。錢后 日々繡^{たちき}を鍼るを以て出だして賣る。或いは母家の微かに進む所有りて、以て玉食(美食)を供す。故に復辟の後、錢氏を待(処遇)すること甚だ厚し。兩たびも其の第に幸するに至る。或いは云う今の傳誦する所の「三官經」は、英廟 無聊の時に作る所と爲す、と。南内の諸々の樹石は、景帝俱に移し去りて隆福寺を建つ。後、英宗 反正(復位)し、當時の内官(宦官)の鎖項を將^もって修葺さす。既に成り、壯麗なること大いに舊を逾え、四方に貢する所の奇しき花果を中に雜植す。毎春 暖くして花 開けば、中貴(高官)に命じて閣臣に陪して游賞せしむ。天順[年間]の修理 工を畢えるの時に當りて、趙榮を尚書にし、蒯祥・陸祥を侍郎とし、各々銀二十兩・紵絲二襲を賞す。[趙]榮[が尚書になったの]は楷書(楷書吏)を以てす。二侍郎は、一は木匠・一は石匠なり也。三堂 俱に異途(非正規の科舉出身者)なり。笑う可し(『萬曆野獲編』卷二十四・畿輔・「南内」条)。

私(沈德符)はかつて南内に行ったことがある。禁城外の巽(東南)の隅にある。第一の門、第二の門そして宮殿正門の兩脇の門にいたる。そこが景泰帝の時に英宗をとじこめていたところである。「小南城」といわれるものがそれである。第二の門の内側に前後のある宮殿がある。全体を備えているものの規模が小さい。正面の宮殿に左右の廊下がある。太上皇(英宗)に奉げられたものはただこれだけである。その他の離宮や圓殿・石橋にいたるまで、英宗の復辟後の天順年間に増築されたものであり、もともとものではない。老宦官にたずねると、部屋が狭いだけでなく、護衛もまばらであつたらしい。また、美味な食材が傍らの戸から届けられるものの、送られない時もあった。紙や筆は十分に与えられなかった。外の人とはかりごとを交わすのを慮ったからである。皇后錢氏は、日々繡衣を裁ち切り、それを売った。また、その実家からわずかながら届け物があり、美食を備えたともいう。そのため英宗は復辟の後、皇后錢氏をたいそう重んじ、二度もその実家に御幸することになった。また、いま伝わる「三官經」は、英宗が無聊をかこっていた時に作られたものであるという。南内の種々の樹木や岩は、景泰帝が隆福寺を建てる時に持って行かせた。後、英宗が帝位に返り咲き、宦官の鎖項に修理させた。完成すると、壮大華麗な事はおおきく昔の姿を上回り、献上された珍しい花や実のなる植物をあちこちに植えた。暖かくなると、高官を大學士に付き添わせて遊覧鑑賞させた。天順年間に修理が完成するにあたって、趙榮を尚書にし、蒯祥・陸祥を侍郎として、各々に銀二十兩・紵絲二襲を賞与した。趙榮は文書の吏であり、蒯祥は大工、陸祥は石大工であつた。三人とも、正規の科挙の出身ではない。笑うべきことである、という。沈德符の伝えるところからすると、やはり英宗は軟禁に近い状態に置かれていたようである。

なお、『御撰資治通鑑綱目三編』には、

八月、上皇 瓦剌より至る。入りて南宮に居る。○赦す(『御撰資治通鑑綱目三編』(二十

卷本) 卷七・八葉・明景帝景泰元年)。

とある。「資治通鑑綱目凡例」には、正統の行幸について、郡縣の巡行であるが、

行幸

所過有事、曰帝至某(過ぐる所に事有れば、「帝 某に至る」と曰う)。

間無異事、則不書帝(間に異事無ければ、「帝」は書せず)。

とある。

また、「赦」についても、

凡恩澤皆書、正統曰赦(凡そ恩澤は皆な書す。正統は「赦」と曰う)。

とある。

いわゆる朱子学の『資治通鑑綱目』的な正統観からすると、この英宗の帰還も、「過ぐる所に事有りて」という正統なものであったといえる。また、太上皇(英宗)が帰還してから後も景泰帝の帝位は、やはり正統なものとされていたといえる。

③皇太子の変更

景泰帝が、皇太子に立てた英宗の長子の見深²⁾を廃して自分の子を皇太子とした経緯を、まず欽定『明史』によって見てみたい。

景皇帝(景泰帝)一子

懷獻太子見濟、母は杭妃。始めは郕王(景泰帝)の世子と爲る。英宗 北狩し、皇太后命じて「英宗の長子の見深、すなわち後の」憲宗を立てて皇太子と爲し、郕王(景泰帝)を以て監國とす。郕王(景泰帝)即位するに及び、心に「自分の子の」見濟を以て太子に代えんと欲す。而れども發し難し。[景泰帝の]皇后の汪氏も又た力めて以て不可と爲す。[そのため]遅回すること久し(欽定『明史』卷一百十九・列傳第七・諸王四・「景帝子懷獻太子見濟」・十四葉)。

景泰帝の太子の見濟は、母は杭妃であった。英宗が拉致されたため、皇太后は、英宗の長子の見深(後の憲宗成化帝)を皇太子とし、郕王(景泰帝)を監國とした。そして、郕王(景泰帝)が即位すると、自分の子供の見濟を皇太子に立てたいと望んだ。しかし、言い出しにくかったし、景泰帝の皇后の汪氏もつよく反対したため、なかなか決められなかった。

太監の王誠・舒良 帝の爲に謀り、先ず大學士の陳循・高穀に百金を賄い、侍郎の江淵・王一寧・蕭鑑と學士の商輅は之を半にし、用いて以て其の口を緘^とざさす。然れども猶お未だ發せざるなり。會たま廣西土官都指揮使³⁾の黃玠 私怨を以て其の弟の思明知府の[黃]

2) 『明史』(本紀第十三・憲宗一)によれば、後に憲宗成化帝となる英宗の長子の見深は、初名は「見潛」であった。英宗が復辟して改めてふたたび皇太子となり「見深」と改名する。時期によって、それぞれの名前を使い分けると、混乱を招く恐れがあるため、拙稿では、統一して改名後の「見深」を用いる。

珣^{そこな}を戕^やれ、其の家を滅す。所司 朝に聞す。[黃] 珣 罪を懼れ、急ぎ千戸の袁洪を遣りて京師に走かせ上疏し、帝(景泰帝)に早く親信の大臣と密かに大計を定め、東宮を易建し、以て中外の心を一にし、覬覦(存外)の望みを絶たんことを勧む。疏 入り、景帝(景泰帝)大いに喜び、亟やかに廷臣に下し會議さす。且つ[黃] 珣の罪を釋し、階を都督に進めしむ。時に景泰三年四月なり(欽定『明史』卷一百十九・列傳第七・諸王四・「景帝子懷獻太子見濟」・十四葉～十五葉)。

宦官の王誠・舒良が景泰帝の気持ちを察して謀をめぐらし、大學士の陳循・高穀に百金を下賜し、侍郎の江淵・王一寧・蕭鑑と學士の商輅には五十金を下賜して、だまらせた。しかし、まだ英宗の長子の見深(後の憲宗成化帝)を廃することはできなかった。たまたま、廣西土官都指揮使の黃珣が私怨でその弟の思明知府の黃珣を殺し、その家を亡ぼした。それを朝廷に報告され、黃珣は千戸の袁洪を都に行かせ、景泰帝に信任する大臣とともに密かに大計を定め、皇太子を変更し、中外の心をひとつにして、英宗を復位させるといような存外の望みを断ち切るように勧めた。その疏が奉られると、景泰帝はおおいに喜び、廷臣にすみやかに議論させた。また、提案してきた黃珣の罪を許し、その官位を進めた。景泰三年四月のことである。

疏 下るの明日、禮部尚書の胡濙・侍郎の薩琦・鄒幹 文武の羣臣を集め廷議す。衆 相い顧みて敢えて言を發する莫し。惟だ都給事中の李侃・林聰、御史の朱英 以て不可と爲す。吏部尚書の王直 亦た難色有り。司禮太監の興安 聲を厲しくして曰く、此の事 已む可からず。即ち以て不可と爲す者は、署名すること勿れ。兩端を持すること無し、と。羣臣 皆な唯唯として署議(署名)し、奏上す。報じて可とす。是に於いて[胡] 濙等暨^{およ}び魏國公の徐承宗、寧陽侯の陳懋、安遠侯の柳溥、武清侯の石亨、成安侯の郭晟、定西侯の蔣琬、駙馬都尉の薛桓、襄城伯の李瑾、武進伯の朱瑛、平郷伯の陳輔、安郷伯の張寧、都督の孫鏜・張軏・楊俊、都督同知の田禮・范廣・過興・衛穎、都督僉事の張軏・劉深・張通・郭瑛・劉鑑・張義、錦衣衛指揮同知の畢旺・曹敬、指揮僉事の林福、吏部尚書の王直、戸部尚書文淵閣大學士の李循、工部尚書東閣大學士の高穀、吏部尚書の何文淵、戸部尚書の金濂、兵部尚書の于謙、刑部尚書の俞士悅、左都御史の王文・王翱・楊善、吏部侍郎の江淵・俞山・項文耀、戸部侍郎の劉中敷・沈翼・蕭鑑、禮部侍郎の王一寧、兵部侍郎の李賢、刑部侍郎の周瑄、工部侍郎の趙榮・張敏、通政使の李錫、通政の欒暉・王復、參議の馮貫、諸寺卿の蕭維禎・許彬・蔣守約・齊整・李賓、少卿の張固・習嘉言・李宗周・蔚能・陳誠・黃士儁・張翔・齊政、寺丞の李茂・李希安・柴望・鄺鏞・楊詢・王溢、翰林學士の商輅、六科都給事中の李讚・李侃・李春・蘇霖・林聰・張文質、十三道御史の王震・朱英・涂謙・丁泰亨・強弘・劉琚・陸厚・原傑・嚴樞・沈義・楊宜・王驥・左鼎と上言し、「陛下 天の明命を膺^うけ、邦家を中興すれば、統緒の傳は宜しく聖子に歸すべし。黃珣の奏は是なり、

✓ 3) 土官は、少数民族の世襲土着官。都指揮使は、その地方の最高軍事長官。廣西土官都指揮使は、廣西の少数民族の世襲土着官の最高軍事長官である。

と。制に曰く、可なり、禮部 具儀して、日を擇び以て聞せよ、と。即日、東宮官を簡置し、公孤（三公と少師・少傅・少保を指す）詹事の僚屬（屬官）悉く備わる（欽定『明史』卷一百十九・列傳第七・諸王四・「景帝子 懷獻太子見濟」・十五葉～十六葉）。

景泰帝の命令が出た翌日、禮部尚書の胡濙などが文武の臣を集めて議論した。群臣は、お互いに見合わせたままで発言するものはいなかった。ただ、都給事中の李侃・林聰と御史の朱英は、不可とし、吏部尚書の王直は難色を示した。司禮太監の興安が声を荒げて、この事は止めることはできない。不可とする者は、署名しなくてもかまわない。両端を持することはできない、とのべる。そこで群臣は皆な唯唯諾諾として署名し、提案され、景泰帝が承認する。そして胡濙などの群臣は、「景泰帝は天命を受けて、国家を中興された。したがって、皇統は聖子（景泰帝の子の見濟）が享けるべきである。黃珵の奏上は正しいものであった」と提言する。景泰帝はそれを認め、禮部に儀式を整えるように、という。即日、皇太子についての部署が置かれ、官僚が整備された。

〔景泰三年〕五月、汪后を廢し、杭妃を立てて皇后と爲す。太子（皇太子であった英宗の長子の見深）を更め封じて沂王と爲し、〔景泰帝の子の〕見濟を立てて太子と爲す。詔して曰く、「天 下民を佑け、之が君と作す」（『書經』泰誓上）、實に四海を遺安（『後漢書』逸民傳にもとづく：安寧無事にする）にし、父 天下を有ち、之を子に傳う。斯れ固より萬年を固くす、と。天下に大赦し、百官をして朔望（毎月の一と十五日）に太子に朝せしむ。賜うに諸々の親王・公主・邊鎮・文武内外の羣臣、又た加えて賜うに陳循・高穀・江淵・王一寧・蕭鎡・商輅に各々黄金五十兩もてす。四年二月乙未（八日）、太子 冠す。十一月、御史の張鵬の言を以て、東宮師傅講讀官を簡す。越えて四日〔の十九日に〕、太子 薨ず。諡して「懷獻」と曰う。西山に葬る。天順元年、降して「懷獻世子」と稱し、諸々の易儲を建議する者は皆な罪を得（欽定『明史』卷一百十九・列傳第七・諸王四・「景帝子 懷獻太子見濟」・十六葉）。

景泰三年五月に、汪皇后を廢して、〔新しく皇太子に立てられた見濟の母の〕杭妃を皇后に改めた。皇太子であった英宗の長子を見深を沂王とした。景泰帝は詔して「『天は人々を降し生じ、そのために君を立てた』。實に四海を安寧にし、父が天下を有ち、それを子に伝える。それはもとより万年を盤石にするものである」という。そして、大赦して、皇太子の見濟に対して毎月の一と十五日の朝謁の禮を行なわせ、それぞれの臣下に黄金を下賜した。皇太子の見濟は、景泰四年二月八日に冠（元服）し、景泰四年十一月十九日に亡くなった。「懷獻」と諡し、西山に葬った。英宗が復辟し、「懷獻世子」と称号をあらため、皇太子の変更を提案したものたちはすべて罪を得た、という。

つまり『明史』では、以下のように述べる。景泰帝は、即位すると自分の子を皇太子に改めたいと考えた。しかし、言い出すことができず、また皇后からも反対され、くずくずしていた。そこで宦官の王誠・舒良が謀って、まず臣下に黄金を下賜し、反対意見をださないようにとし

たが、なかなか皇太子変更の提案ができなかった。たまたま、廣西土官都指揮使の黃珵が、皇太子の廃立を提案したことによって、臣下のものたちに無理強いして変更の提案を行なわせた。提案されると、すぐに景泰帝は裁可し、皇太子を変更し、景泰帝の皇后で皇太子の変更に反対した汪皇后を廃して、新しく皇太子に立てた見済の母の杭妃を皇后に改めた。しかし、すぐに新皇太子は薨去した、と。

なお、景泰帝の太子の見済の年齢は、『弇山堂別集』（卷三十一・帝系・「東宮紀」条）に、
 懷獻太子見済は、景皇帝（景泰帝）の長子なり。母は皇后杭氏と曰う。正統十□（一字欠）
 年七月初二日生。景泰三年四月乙酉、冊立され皇太子と爲る。天下に大赦し、中外に賞賚す。
 四年二月己亥 薨ず。追諡す。天順元年に「世子」と稱さる（『弇山堂別集』卷三十一・帝系・
 「東宮紀」条）。

とある。正統年間は十四年までなので、景泰帝の太子の見済は、正統十一年（一四四五）～正統十四年（一四四九）の間に生まれ、景泰四年（一四五三）十一月十九日に薨去したことになる。すると、亡くなった時の年齢は、かぞえて五歳から八歳までの間となる。

英宗の長子の見深（後の憲宗成化帝）は、正統十二年（一四四七）十一月二日生まれである。したがって、景泰帝の太子の見済が亡くなった景泰四年（一四五三）十一月十九日の段階では、かぞえて七歳となる。つまり、両者はほぼ同年齢であったといえる。

さらにいうと、景泰三年五月甲午（二日）にだされた皇太子と皇后の変更の詔（本稿 80 頁所引）のなかで、景泰帝が、「朕（景泰帝）が長子（見済） 序は倫先に在り、宜しく東宮を正し、以て繼體（繼位）の事を明らかにすべし（朕長子序在倫先、宜正東宮、以明繼體事）」（『大明英宗法天立道仁明誠敬昭文憲武至德廣孝睿皇帝實錄』卷二百十六・廢帝郕戾王附錄第三十四・「景泰三年五月甲午（二日）」条）」と述べていることからすると、景泰帝の長子の見済は、英宗の長子の見深（後の憲宗成化帝）よりも年上であったとも考えられる⁴⁾。

では、この皇太子の変更については、『實錄』において、どのように記録されているのだろうか。いま『實錄』を見ると、それぞれの出来事が別々に記録されている。まず、景泰三年四月一日に白金（銀子）の下賜が記録される。

〔景泰三年四月甲子朔（一日）〕少保戸部尚書兼文淵閣大學士の陳循・少保工部尚書兼東閣大學士の高穀に各々白金（銀子）一百兩、吏部左侍郎兼翰林院學士の江淵・禮部左侍郎兼翰林學士の王一寧・戸部右侍郎兼翰林院學士の蕭鎡・翰林院學士の商輅に各々白金（銀子）五十兩を賜う（『大明英宗法天立道仁明誠敬昭文憲武至德廣孝睿皇帝實錄』卷二百十五・廢帝郕戾王附錄第三十三・「景泰三年夏四月甲子朔（一日）」条）。

4) 『實錄』に引く詔は、「朕長子序在倫先」となっている。この「序在倫先」の「序在」が「在序」の転倒誤記であると考えられるならば、「倫序（順序）の先に在り」もしくは「倫序（順序）に在りては先なり」と読むことができ、景泰帝の長子の見済は、英宗の長子の見深（後の憲宗成化帝）よりも年上であったというように理解できるのでないだろうか。

なお、談遷の『國權』では、「白金（銀子）」の下賜を「金」を下賜したとし、皇太子の変更に関連付けて述べている。

[景泰三年] 四月甲子朔（一日）、上（景泰帝） 東宮を廢し、其の子の見濟を立てんことをおもを意うも、未だ敢えて發せざるなり。太監の王誠・舒永 先ず諸々の大臣に金を賜わんことを請う。是に于いて少保戸部尙書兼文淵閣大學士の陳循・少保工部尙書兼東閣大學士の高穀に各々百金、吏部左侍郎兼學士の江淵・禮部左侍郎兼學士の王一寧・戸部右侍郎兼院學士の蕭鎡・翰林院學士の商輅に各々五十金を賜う。[しかし] 亦た未だ敢えて發せざるなり（『國權』 卷三十・代宗景泰三年・「景泰三年夏四月乙酉（二十二日）」条・一九二三頁）。中華書局刊『國權』所収の張宗祥の「題記」によると、『國權』は、清・順治十年（一六五三）前後に成ったと推定されている。すると、この『國權』の記述は、『實錄』の記事を基礎にしながら、以下で検討する明代の史料を取りこんで、述べられたとも考えられる。『實錄』では、「白金（銀子）」を下賜したという事実のみ記されているからである。

なお、金品の下賜について、黃瑜（字は廷美、香山の人。景泰の舉人）の『雙槐歲鈔』では、つぎのようなことを伝えている。

景泰の初め、經筵を開く⁵⁾に太保寧陽侯の陳懋 經筵の事を知らしめ、戸部尙書兼翰林學士の高穀 同じく經筵の事を知らしめ、戸部右侍郎兼學士の江淵・學士の商輅・侍講學士の劉鉉・吏部右侍郎の俞山・禮部左侍郎の儀銘・兵部右侍郎の俞綱・祭酒の蕭鎡・左春坊左諭徳の趙琬に經筵官を兼ねるを命ず。相い傳えて[以下のように]云う。是の時、講畢る毎に、中官に命じて金錢を地に布き、講官をして之を拾わしめ、以て恩典と爲す。高

5) 『實錄』によると、景泰元年九月十二日に經筵を開く詔がだされている。

[景泰元年九月] 癸丑（十二日）、勅して曰く、朕（景泰） 眇躬（皇帝自身）を以て天命を祇膺（敬しんで受ける）し、祖宗の大統を嗣承（繼承）し、兆民に臨御す。惟だ負荷（負擔）の勝う可きは、必ず問學の能敏に由るを顧み、[そのため] 茲に九月十六日を以て經筵に御す。[そこで以下のように] 爾に命ず。太保寧陽侯の陳懋は經筵の事を知り、戸部尙書兼翰林院學士の陳循・工部尙書兼翰林院學士の高穀は同じく經筵の事を知り、戸部右侍郎兼翰林院學士の江淵・翰林院學士の商輅・侍講學士の劉鉉・吏部右侍郎の俞山・禮部左侍郎の儀銘・兵部右侍郎の俞綱・國子監祭酒の蕭鎡・左春坊左諭徳の趙琬 經筵官を兼ね、[陳] 循・[高] 穀・[江] 淵・[商] 輅は日々講讀に侍し、翰林等の衙門の儒臣は侍講し、吳節・趙恢・徐瑄・陳文・劉定之・周旋 修撰、林文・李紹は編修し、薩琦・楊鼎・呂原・周洪謨・劉俊・陳鑑・岳正・萬安・劉吉・劉珣・李泰 檢討、邢讓は分直侍講せよ。夫れ六經は帝王の道を載せ、萬世 治教（政教）の則なりと仰ぐ。我が祖宗の聖を以て尚猶お斯こに銳情（專一に心配りする）なり。況んや朕（景泰帝）の務める所に安んじて然らざるをや。卿等 其れ端心（一心）に竭誠（心をつくす）して相い與に講論に務め、其の極至に臻れ。隱し且つ徒に虛名に事うるに徇うこと毋れ。必ず二帝三王の蘊奧（心）に得て、行いに施し、四方萬國の廣遠をして其の徳を蒙りて、其の澤を被らしめよ。斯れ以て朕の素志に副うるに足る、欽しめ。仍お武清侯の石亨・昌平侯の楊洪・安遠侯の柳溥・太子太傅兼禮部尙書の胡濙・太子太保兼吏部尙書の王直・太子太保兼戸部尙書の金謙・少保兼兵部尙書の于謙・刑部尙書の俞士悅・工部尙書兼大理寺卿の石璣・都察院左都御史の陳鑑・王文等は經筵侍班するを命ず（『大明英宗法天立道仁明誠敬昭文憲武至德廣孝睿皇帝實錄』 卷一百九十六・廢帝郕戾王附錄卷十四・「景泰元年九月癸丑（十二日）」条）。

穀 年六十餘なれば、俯仰 便ならず。恒に能く得る莫し。一講官有り、其の氏名を忘る、常に拾いて以て之に貽る。有識者 其の媒瀆（瀆）を病む。時に宮中 又た諸々の内侍に賜うに銀豆等の物を以てし、関笑（多くの人に笑われる）と爲る。楊文懿公守陳 時に翰林に在りて銀豆を賦（給与）さる……（嘉靖三十八年（一五五九）陸延枝刻本（『四庫全書存目』子部二百三十九冊所収）『雙槐歲鈔』卷第七・「金錢銀豆」条・一葉）。

景泰元年に經筵が開設され、陳懋などがその任に命ぜられた。そして經筵の講義でのこととしてつぎのようなことが伝えられている。それは、講義が終わるたびに、宦官に命じて金錢を床に敷き、それを講官に拾わせて恩典とした。高穀は、六十すぎになっており、うまくかがめなかったため、いつも拾うことができなかった。そこで、氏名が定かでないが、ひとりの講官がいつも拾って高穀に渡した。有識者は 輕佻浮薄であることを憂慮した。その時、宮中でも宦官に銀豆などの物を下賜し、哄笑された。楊守陳は、翰林にしながら銀豆を賜った、というのである。

黄瑜は、当時の伝聞を記したものと思われる。ただ、金錢を床に敷き拾わせて恩典としたことは、いまのところ『實錄』には見いだせない。臣下に金・銀を下賜したことが、云い伝えられるうち、このような伝聞になったとも考えられる。

ただ、欽定『明史』儀銘傳では、この伝聞に信を置き、

帝（景泰帝）講幄（講官の進講を聴く處）に臨む毎に、輒ち中官に命じて金錢を地に擲げ、講官の遍く之を拾うに任せ、恩典と號す。文臣の與かる者は、内閣の高穀等の外、惟だ〔儀銘と俞山・俞綱・蕭鎡・趙琬の數人なるのみ（『明史』卷一百五十二・列傳第四十・儀銘傳・三葉）。

と述べている。

このことに関して、沈德符の『萬曆野獲編』には、つぎのようにある。

〔賜講官金錢〕御前の八局の中に所謂ゆる銀作局なる者有り。金銀の豆葉より以て金銀の錢に及ぶまでを專司（専門に）製造す。輕重 等しからず。累朝 以て宮娃（宮女）及び内侍の賞賜に供す。今上（神宗萬曆帝）冲年（幼年）にして、毎に錢豆を將^もつて地に亂撒し、此輩の拾取に任せ、其の傾跌（つまずき倒れる）・攘奪（掠奪）を觀て、以て笑樂と爲す。然れども可異（奇異の思いを抱く）する者有り。李古廉（李時勉：名は懋、字は時勉、号は古廉、諡は忠文。江西安福の人。洪武七年（一三七四）～景泰元年（一四五〇）。永樂二年甲申科（一四〇四）三甲三十四名の進士）侍講學士と爲る。宣宗（宣德帝）史館に至り、袖中の金錢もて諸々の詞臣に賜うに、俱に争いて地上より拾取す。李〔時勉〕獨り立ちて動かず。上 呼びて前に至らしめ、袖中の錢を以て之に^{おく}資る。蓋し寵〔他の〕儒臣に異なり、偶々一戲劇なるのみ^①。景帝（景泰帝）の初年、經筵を開き、寧陽侯の陳懋・閣臣の陳循・高穀を以て經筵^{つかさど}を知らせ、閣臣の商輅等を講官と爲す。講の畢るに値る毎に、輒ち金錢を地に布き、諸臣をして競い拾わしむ。獨り高文義（高穀）老いたるを以て俯

仰する能わず、遂に得る所無し。同列（同僚）代りて拾い以て之を貽る、と。[沈徳符が]竊かに意うに講筵は争財の所に非ず、宰相は攫金（『列子』説符にもとづく：財物を強盜する）の人には非ず、と。景帝（景泰帝）は亦た英主なり。未だ必ずしも此れ有らざるに似たり（『萬曆野獲編』卷一・列朝・「賜講官金錢」条）。

①王錡（字は元禹、号は葦庵・夢蘇道人。江蘇長洲の人。宣德八年〔一四三三〕～弘治十二年〔一四九九〕）の『寓圃雜記』（卷第二・「宣中書不愛財」条）に、宣宗宣德帝が行なったこととして、「…一日、宣廟（宣宗宣德帝）文淵閣に幸し、喜ぶこと甚だし。銀錢を以て地に撒き、諸々の從官をして競いて取らしむ。惟だ手の疾き者のみ多く得。嗣宗（宣嗣宗：字は彦初。嘉定の人。洪武十三年（一三八〇）～宣德六年（一四三一））諸臣の取り畢るを俟ちて、徐に一文を拾う。上（宣宗宣德帝）之を顧みて謂いて曰く、此の秀才 財を愛せざるや。重幣を以て之に賜う…」とあり、李時勉のものとよく似た逸話を伝える。

宮中の八局の中に「銀作局」というものがあり、金銀の豆葉から金銀の錢に及ぶまでを専門に取り扱い製造した。それらの輕重は異なる。歴代、宮女や宦官に対する賞賜に供していた。今上（神宗萬曆帝）は幼いとき、いつも錢豆を床に撒いて、宮女や宦官の取るにまかせ、そのつまずき倒れたり争奪したりするありさまを見て楽しんだ。しかし、奇異の思いを抱く者もいた。李時勉は侍講學士となった時、宣宗宣德帝が、史館を訪問し、袖中から金錢を出して詞臣に下賜し、臣下の者たちは、みんな争って床から拾った。だが李時勉だけは動かなかった。宣宗宣德帝が、呼んで御前に来させ、袖中の錢を与えた。おそらくこれは恩寵が他の儒臣に異なるという一種のパフォーマンスであろう。さらに、景帝（景泰帝）の初年に、經筵を開き、寧陽侯の陳懋・閣臣の陳循・高穀に經筵^{つかさど}を知らせ、閣臣の商輅等を講官とした。講義が終わると、金錢を床に布き、諸臣を競って拾わせた。ただ高穀は、年老いていたため俯仰できず、拾うことができなかった。そのため同僚が代って拾い渡した。沈徳符が竊かに思うに、講筵は争財の場所でないし、宰相は攫金（財物を強盜する）の人ではない。景帝（景泰帝）は亦た英主である。こうしたことはなかっただろう、というのである。

さて、『實錄』によると、景泰三年四月一日に白金（銀子）を下賜し、廃立を願う上奏が提出されたことを景泰帝は認め、それを検討するようという詔が四月二十一日に出される。そして四月二十二日に皇太子の変更について会議を行い提案がなされた。

『實錄』では、黃珣の上奏やそれに至る経緯は、四月二十一日の条に掛けている。そこでは、つぎのようにいう。

[景泰三年四月甲申（二十一日）]、先是れより先、廣西思明府の致仕する土官知府の黃珊^{ママ}（珊）の子の[黃]鈞 已に代りて知府と爲る。[黃]珊^{ママ}（珊）の庶兄の都指揮使の[黃]竑^{ママ}（竑）[黃]鈞を殺し己の子を以てせんとす。[黃]竑^{ママ}（竑）潯州を守備す、記（託：『明史』卷三百十八・列傳第二百六・廣西土司二に「託言」に作るのによる）言（仮に口実を作り）して兵を思明府に徴し、其の子をして衆を糾して寨を府の三十五里の外に結ぶ。夜に馳せて府に至り、襲いて[黃]珊^{ママ}（珊）一家を殺し、[黃]珊^{ママ}（珊）及び[黃]鈞を支解（解：『明史』

卷三百十八・列傳第二百六・廣西土司二に「支解」に作るのによる）し、^マ後圃（後圃：『明史』卷三百十八・列傳第二百六・廣西土司二に「後圃」に作るのによる）に薨瘞し、仍りて原寨に歸る。明日、乃ち入城し、詐りて喪を發し、人を遣りて〔黃〕珏 賊を捕らうと報じ、以て其の迹を掩う。〔黃〕珏を殺すの時に^{あた}方りて、〔黃〕珏の僕の福童 免るるを得、憲司に^ゆ走きて其の事を訴え、仍お徴兵の檄を以て証と為す。〔それは〕郡人 皆な〔黃〕珏の家を殺す者は、〔黃〕珏父子なりと言うに闔（符合）す。左副總兵都督僉事の武毅等 已に具に朝に聞し、將に之を逮治（逮捕）せんとす。〔黃〕珏 自から禍の及ぶを度り、朝廷の意に迎合し、禍を轉じて以て福と為さんことを謀り、千戸の袁洪を遣りて「永固國本事」を奏言す。〔そこでつぎのようにいう〕臣 竊かに聞く、太祖高皇帝 淮甸（淮河流域）に龍飛（興起）し、雷厲（迅猛）に中天す。豪傑 歸心し、群雄 應詔（詔命を受け入れる）す。櫛沐風雨（勞苦する：『莊子』雜篇・天下の「甚雨に沐し、疾風に櫛ずる」にもとづく）、僭亂を削平（平定）して、帝業を成す者なり。必ず聖天子の神孫（子孫の君主） 之を無窮に傳えんことを期す。今、八十餘年を経て、海宇（疆域）の廣く・億兆の衆きこと、三代より下、未だ之れ有らざるなり。前歲、胡寇 犯邊（辺境を犯し）す。〔こうしたことは〕古より常に有り。〔しかし〕太上皇（英宗） 輕しく〔その挑発に〕屈し、萬乘 六師を親御し、寨險に臨み、虜の遮留（阻み引き留める）を被り、扈從する文武群臣・天下將士、十に八九を喪う。逆虜 勢いに乗じ、長驅して逼臨（接近）す。市師・四方 震懼（恐れおののく）し、危殆（危険）なるに^{ちか}幾し。〔だが〕太祖太宗列聖の靈に頼り、預め聖功（景泰帝）を^う誕み、大寶（帝位）を繼登す。然らざれば、則ち民 何れの歸する所あらん。此れ實に上天 ^{かえり}眷み命ずるなり、當時の預め畫する者に非ざるなり。今、二年を踰ぎ、未だ皇儲を易立するを見ず。臣 切に〔思うに〕國本（太子を立てること）は、緩くす可からざるなり。古の聖王の天下を奄有する者は、未だ本に急ならざること有らず。今、朝廷と顧命の大臣 已に公見有りと雖も、愚臣 何ぞ得て之を知らん。切に^す踰ぎること久しければ、議論 妄りに生ずるを恐る。況んや今時の俗は不古（淳樸ではない）、人心 搖らぎ^{やす}易し、爭奪 一たび禍亂を萌せば息み難し。或いは朝廷の前代の遜讓の美に循い、復た天倫（兄弟）の序を全うせんと欲すとせば、臣 勢の不可なる者有るを恐る。若し皇太后の尊及び東宮の至親にして遽かに易うるに忍びざること有りと謂うとも、然れども天命豈に逆違（あらがう）す可けんや、^マ固（國）本 豈に輕がろしく緩くす可きや。古人 云う有り、「天の與えを取らざれば、反って其の咎めを受く」（『史記』越王句踐世家・張耳陳餘傳・淮陰侯傳）と、又た土星の太微垣を逆行するに及ぶは、盖し上天の諭を垂れる所有ればなり。願わくは今に及ぶに、留意して天命を以て與人（人心に迎合する）に轉付せず、早に親信する文武の大臣と密議し、以て大計を定めて春宮（皇太子）を易え建て、中外の心を一にし、覬覦の望（分を越えた望み）を絶たんことを。〔そうすれば〕天下 幸なること甚し、と。奏 入り、詔して曰く、此れ天下國家の重事なり。多官もて其れ會議

し以て聞せよ、と。[黃] 玠 此の擧を為し、衆 皆な驚愕して謂う、必ず其の賂を受けて、之に教うる者有り、と。或いは侍郎の江淵を疑うと云う^{しかい}。事 成り、[黃] 玠 果して罪を釋さるを得、陞官す（『大明英宗法天立道仁明誠敬昭文憲武至德廣孝睿皇帝實錄』卷二百十五・廢帝邸戾王附錄第三十三・「景泰三年夏四月甲申（二十一日）」条）。

黃珣の子の黃鈞は、父の廣西思明府の土官知府を引き継いだ。黃珣の庶兄の都指揮使の黃玠は、黃鈞を殺して自分の子をその地位につけたいと考えた。黃玠は、潯州の守備についており、口実を設けて思明府で徴兵して、自分の子を使って思明府から三十五里のところに砦を築かせた。夜に思明府に押し寄せ、黃珣一家を殺害し埋めて、砦に帰った。翌日、詐って喪を發して、黃玠が犯人を捕らえたと報告させ、犯行を蔽い隠した。ところが、黃珣の使用人の福童が殺害を免れて、役所に逃げこみ、犯行を訴えた。そして徴兵の檄文を証拠とした。その証拠は町の人たちが、黃珣一家を殺害したのは黃玠であると言うのと符合した。左副總兵都督僉事の武毅などは、朝廷に報告し、黃玠を逮捕しようとした。黃玠は、危険を察知し、皇帝の意向に迎合して、禍を転じて福としようと謀り、袁洪を派遣して「永固國本事」疏を上奏させた。その疏にはつぎのように言う。私がひそかに聞き及ぶところでは、太祖洪武帝は、淮河地域に興起され、迅速に天にまで登られた。他の豪傑は帰心し、群雄は命令を聞き入れるようになった。苦勞されて、天下を平定され、帝業を成されたました。必ずや子や孫に帝業を伝えていきたいとお考えになっていたことでしょう。それから八十年あまりをへて、疆域の広さ・人々の多さは、三代より以後見当たらないものであります。前年、異民族が辺境を犯しました。こうしたことは古より常にあったことです。しかし、太上皇（英宗）は、その挑発に乗り、親征を行なわれた。その結果、砦で拘留されて、扈從した文武の群臣や天下將士は、十のうち八九までも滅んでしまいました。都や四方八方で懼れ驚き、危機的な状態となりました。しかし太祖・太宗などの御先祖さまのおかげで、あらかじめ景泰帝がお生まれになっておられ、帝位を継がれ、[危機は回避されました]。そうでなければ、人々は何をよりどころとすればよかったのでしょうか。これは天が眷（かえり）みて命じたものであり、今の人たちがもともと計画しておいたものではありません。いま景泰帝が即位されてから二年が過ぎましたが、まだ皇太子の変更がなされておられません。私は、國本（皇太子を立てる）のことは、ゆっくりとすべきでないと思います。古の聖王で天下を有した人は、急がなかったことはありません。いま、朝廷と信任の大臣の方たちは見解をお持ちかもしれませんが、愚臣はそれを知りようがありません。あまりにもゆっくりしておりますと、いろいろな議論が起こる恐れがあります。ましてやいまの風俗は昔のように純朴ではありません。人心は揺らぎやすいものです。争奪することから禍が萌せば、なかなかおさまりません。また、朝廷の謙讓の美德にしたがい、さらに兄弟の順序を全うされたいと願われるならば、それは勢いとして認められないことを恐れます。もしも、皇太后や英宗の皇太子が至親であり、にわかに変更するのに忍びないとおっしゃっても、天命に逆らうことができますでしょうか。國本（皇太子を立てる）のことは、ゆっくりとすべきなのではないでしょうか。

古人も「天の^{あた}與えを取らざれば、反って其の咎めを受く」と申しております。また土星が宮廷の象徴である太微垣を逆行しておりますのは、おそらく天の告知なのでしょう。いまこの天命が下されているのかえって人心に迎合されることはなさらず、はやく信任される文武の大臣たちと相談され、大計を定めて皇太子を廃立、中外の心をひとつにし、分を越えた望みをお断ちになることをお願いいたします。そうすれば天下の幸いとなります、と。上奏文が提出されて、景泰帝は、これは天下国家の大事である。多くの官僚で会議して、結果を報告せよ、と詔を出した。黄珣がこうした挙に出て、皆は驚き、必ず賄賂をもらって、教えたものがある、と言った。あるいは、侍郎の江淵が疑われたという。後に、皇太子の廃立が行なわれ、黄珣は、果たして罪を赦されて、陞官した、というのである。

この皇太子の廃立について検討するやうにという詔がでた翌日、会議が行なわれ、皇太子の廃立の提案がなされる。『實錄』は、つぎのようにいう。

[景泰三年夏四月乙酉(二十二日)] 皇太子を^か易えんことを議(提案)す。初め黄珣の奏ありて禮部尚書の胡濙・侍郎の薩琦と鄒幹に下し、文武群臣を集めて議す。衆 心に不可なるを知る、然れども敢て發言する莫く、遲疑する者なり。^{ひさしく}久之して、司礼監太監の興安聲を厲しくして曰く、此の事 今は已む可からず、肯てせざる者は僉名(署名)を用めず。尚お何ぞ遲疑すること之れ有らん、と。是に於いて一人の敢て違ふ者無し。其の議 遂に定まる。[胡] 濙等 遂に魏國公の徐承宗、寧陽侯の陳懋、安遠侯の柳溥、武清侯の石亨、成安侯の郭晟、定安侯の蔣琬、駙馬都尉の薛桓、襄城伯の李瑾、武進伯の朱瑛、平郷伯の陳輔、安郷伯の張寧、都督の孫鏜・張軫・楊俊・都督同知の田禮・范廣・過興・衛穎、都督僉事の張軫・劉深・張通・郭瑛・劉鑑・張義、錦衣衛[指揮]同知の畢旺・曹敬、指揮僉事の林福、[吏部]尚書の王直、[戸部]尚書文淵閣大學士の李循、[工部]尚書東閣大學士の[高穀]、[吏部]尚書の[何文淵]、[戸部]尚書の[金濂]、[兵部]尚書の[于謙]、[刑部]尚書の[俞士悅]、左都御史の王文・王翱・楊善、[吏部]侍郎の江淵・俞山・項文耀、[戸部]侍郎の劉中敷・沈翼・蕭鑑、[禮部]侍郎の[王一寧]、[兵部]侍郎の[李賢]、[刑部]侍郎の[周瑄]、[工部]侍郎の[趙榮]・張敏、通政使の李錫、通政の欒懌・王復、參議の[馮]貫、[諸寺]卿の蕭維禎・許彬・蔣[守]約・齊整・李賓、少卿の張固・習嘉言・李宗周・蔚能・陳誠・黃士儁・張翔・齊政、寺丞の李茂・李希安・柴望・鄺鏞・楊詢・王溢、翰林院學士の商輅、六科都給事中の李讚・李侃・^{ママ}李眷(春)・蘇霖・林聰・張文質、十三道御史の王震・朱英・涂謙・丁泰亨・強宏・劉琚・陸厚・[原]傑・嚴樞・沈義・楊宜・王驥・左鼎と 聯名もて合奏(共同上奏)するに、「父 天下を^{たも}有てば、必ず子に傳う。此れ三代の享國の長久なる所以なり。惟れ陛下(景泰帝) 天の明命を^う膺け、邦家を中興す。統緒の傳うるは宜しく聖子(皇帝の子)に歸すべし。今、黄珣の奏する所は宜しく^{ゆる}允すべし」と。言う所の疏入る。詔して曰く、卿等の言う所の三代聖王[のこと]は大いに道理あり。近日、耆舊(高齢で声望のある人)・内内(「内」の一字は衍字か。『國榷』は「近者、耆舊内臣亦來導」

に作る)臣 亦た俱に來り、卿等の言う所に遵い與かるを勸む。[しかし]皆な朕 敢て自ら專にせず、聖母上聖皇后に上請し、懿旨(皇太后の文書)を蒙る。[その]宣諭に「只だ宗社 安んじ、天下太平なるを要す。今、心 既に此の如くなれば、當に人心の行くに順うべし」と。朕 此れを以て敢て固より違わず。禮部 議を具し日を擇び以て聞せよ、と(『大明英宗法天立道仁明誠敬昭文憲武至德廣孝睿皇帝實錄』卷二百十五・廢帝郕戾王附錄第三十三・「景泰三年夏四月乙酉(二十二日)」条)。

景泰三年夏四月二十二日に皇太子の変更が提案された。初め黃珵の変更についての上奏があり、それが禮部尚書の胡濙・侍郎の薩琦と鄒幹に下されて、文武群臣が集まり議論した。みんなは、心では不可であることを理解していた。しかし、敢て発言するものはなく、ぐずぐずしていた。しばらくして、司礼監太監の興安が声を厲しくして「この事は、今では止めることはできない。認めたくないものは署名をもとめない。どうしてぐずぐずするのか」という。こうして一人も敢て違おうとせず、変更の提案は、とうとう決定した。そして、胡濙などが連名で上奏して「父天下を有^{たも}てば、必ず子に傳う。これは三代の享國の長久である所以です。陛下(景泰帝)は天命をうけて、国家を中興されました。帝位は当然実の太子にお伝えすべきものであり、黃珵の提案はお認めになるべきです」という。この案が提出され、詔が出され「みんなのいう三代の聖王のことは大いに道理がある。また最近、長老の臣や宦官なども皆のいうところにしたがうようにと勧めてくる。だが朕(景泰帝)自身では好き勝手できないので、皇太后に願ひ出て、そのお指図をいただいた。そこには、ただ国家を安んじ、天下太平であることが必要である。いま、帝の心がそうであるならば、人心の望むとおりに行なえ、とあった。朕(景泰帝)はこのお言葉を違えることはできない。禮部は提案を取りまとめて、日時を択んで上奏せよ」という。

さらに、『實錄』によれば、皇太子の変更の提案が決定した日に、皇太子の官属が告げられる。皇太子の変更に関与した官僚はつぎのような職を兼務するようにいわれるのである。

[景泰三年夏四月乙酉(二十二日)]東宮の官属を置く。寧陽侯の陳懋・武清侯の石亨・少傅禮部尚書の胡濙・少傅吏部尚書の王直は俱に太子太師を兼ね、安遠侯の李溥と少保戸部尚書兼文淵閣大學士の陳循と少保工部尚書兼東閣大學士の高穀と少保兵部尚書の于謙は俱に太子太傅を兼ね、都督僉事張輓は太子太保を兼ねて陞り、吏部尚書の何文淵と戸部尚書の金濂と南京禮部尚書の儀銘と刑部尚書の俞士悅と工部尚書兼大理寺卿の石璞と都察院左都御史の陳鎰・王翔は俱に太子太保と為し、吏部左侍郎兼翰林院學士の江淵と禮部左侍郎兼學士の王一寧と戸部右侍郎兼學士の蕭鎡は俱に太子少師と為し、吏部左侍郎の俞山は太子少傅と為し、兵部左侍郎の俞綱は太子少保と為し、俱に仍お舊職を兼ねしめ、璞止は尚書を兼ね陞し、翰林院學士の商輅は兵部左侍郎兼左春坊大學士と為し、仍お舊職を兼ねるを命ず。戸部左侍郎の劉中敷は太子賓客を兼ね陞し、太常寺少卿の習嘉言は詹事府詹事と為るを命ず。吏部右侍郎の項文耀と禮部右侍郎の薩琦は俱に少詹事を兼ね、礼部右侍郎の

鄒幹は左庶子を兼ね陞し、翰林院侍讀の彭時は左春坊と為し、大學士侍講の劉儼は右春坊と為し、大學士の周旋は左庶子と為し・[大學士の] 趙恢は右庶子と為し、修撰の林文は左諭徳と為し、侍講の徐理は右諭徳と為し、修撰の李紹と侍講の劉定之は俱に司經局洗馬と為し、侍講の楊鼎・倪謙は春坊左中允と為し、侍講の呂原と修撰の柯潛は右中允と為し、俱に兼舊職を兼ね、都給事中の李佩と監察御史の魏齡は俱に詹事府府丞と為し、編修の周洪謨と劉俊は左贊善と為し、檢討の錢溥と編修の兵^{ママ}(岳)正は贊善と為し、編修の萬安・李泰と都給事中の林聰と典簿の鄒循は俱に司直郎と為し、洪謨の王泰は俱に舊職を兼ね、侍書の陳穀・徐泌と監丞の鮑相と縣丞の高誠は俱に清紀郎と為し、檢討の曾暹・傅宗と五經博士の陸藝と典籍の李鑑は俱に司諫を兼ね、編修の王與は司經局校書を兼ね、郎中書舍人の劉鉞・趙昂は俱に正字を兼ね陞し、教諭の李瓊は檢書と為し、待詔の趙政は詹寺府主簿と為し、教諭の劉潔は録事と為し、序班の楊欽・王政・周寧・傅榮は俱に通事舍人と為るを命ず。(『大明英宗法天立道仁明誠敬昭文憲武至德廣孝睿皇帝實錄』卷二百十五・廢帝邸戾王附錄第三十三・「景泰三年夏四月乙酉(二十二日)」条)。

そして、その二日後には、皇太子の官職を兼務するように命ぜられた官僚に、もとの官職の給与と兼務するようになった官職の給与とを支給するようにと命ぜられる。命を受けた王直たちは、辞退するが、景泰帝は認めなかった、という。

[景泰三年夏四月] 丁亥(二十四日)、少傅もて太子太師を兼ねる吏部尚書の王直、少傅もて太子太師を兼ねる禮部尚書の胡濙、少保もて太子太傅を兼ねる兵部尚書の于謙、少保もて太子太傅を兼ねる戸部尚書文淵閣大學士の陳循、少保もて太子太傅を兼ねる工部尚書東閣大學士の高穀、太子少師もて吏部左侍郎を兼ねる翰林院學士の江淵、太子少師もて禮部左侍郎を兼ねる翰林學士の王一寧、太子少師もて戸部右侍郎を兼ねる翰林院學士の蕭鑑、兵部左侍郎翰林院學士もて左春坊を兼ねる大學士の商輅、太子太保もて吏部尚書を兼ねる何文淵、太子太保もて戸部尚書を兼ねる金濂、太子太保もて刑部尚書を兼ねる俞士悅、太子太保もて都察院左都御史を兼ねる王文・楊善・王翱、太子少傅もて吏部左侍郎を兼ねる俞山、太子少傅もて兵部左侍郎を兼ねる俞綱に命じて俱に二俸を兼支す。[王]直等 具疏して陳讓するも、^{ゆる}允されず(『大明英宗法天立道仁明誠敬昭文憲武至德廣孝睿皇帝實錄』卷二百十五・廢帝邸戾王附錄第三十三・「景泰三年夏四月丁亥(二十四日)」条)。

こうして、翌月に皇太子変更の詔が出されるのであるが、その詔が出る前日の五月一日、つぎのようなことがあった。皇太子を立てる儀式用に奉天門に設置した香亭を男が赤い棍棒で殴りつけたというのである。『實錄』は、つぎのようにいう。

[景泰三年五月癸巳朔(一日)]、明日太子を立つるを以て香亭(儀式用の持ち運び可能で、内に香炉を置いた小亭)を奉天門に具う。一人有りて外より徑ちに入る。紅棍を執りて香亭を撃ちて曰く、先ず東方(東宮)の甲乙(優劣)の木を打たん、と。内使 之を執う。命じて錦衣衛に附す(『大明英宗法天立道仁明誠敬昭文憲武至德廣孝睿皇帝實錄』卷

二百十六・廢帝鄺戾王附錄第三十四・「景泰三年五月癸巳朔（一日）」条。

『國權』では、

是の日（景泰三年五月一日）、東宮の儀杖を奉天門に具う。男子有りて赤梃を持して直ちに入りて香亭を撃つ。奮呼して曰く、先ず東方（東宮）の甲乙（優劣）の木を打たん、と。内使 之を縛る。命じて錦衣の獄に下す。瘦死す（『國權』 卷三十・代宗景泰三年・「代宗景泰三年五月朔（一日）」条・一九二七頁）。

という。

こうしたことがあったものの、皇太子と皇后の変更の詔が景泰三年五月甲午（二日）にだされる。

[景泰三年五月甲午（二日）] 皇妃杭氏を冊立して皇后と為し、長子見済を皇太子と為す。天下に詔して曰く、朕 涼薄（淺薄）の躬を以て艱危（艱難危急）に際し、天地祖宗の眷佑（庇護）^{さかん}の隆なるに頼り、母后・臣民の付戴の重きを膺け、大寶（帝位）を嗣臨（皇位に登る）し、家邦を固くせんとして、方に負荷（繼承）の勝えざるを蒙る。豈に授承の敢て慮らんや。而して皇親・公侯・駙馬伯及び在廷の文武群臣乃ち合辭して上請するに、以為らく「天 下民を佑け、之が君と作す」（『書經』 泰誓上）、實に四海を遺安（『後漢書』 逸民傳：安寧無事にする）にし、父 天下^{たも}を有ち、之を子に傳う。斯れ固より萬年を固くするなり。[また]此れ三代の聖謨（貴い教え）、誠に百王の懿範（麗しい道德規範）なり、と。朕が長子 序は倫先に在り、宜しく東宮を正し、以て繼體（繼位）の事を明らかにすべし。[そこで]方に聖母に聞すれば、遽^{すみ}やかに輿情（民情）に允（応）ずるを見さる。復た皇后の謙冲（謙虛）を以て、固より軒龍（皇帝）の子有るに遜^{ゆず}らんとし、再三陳懇すれば、理順い名鴻なり、肆^{ゆえ}に慈訓（父母の教誨）の諄なるに循い、兼ねて賢情の切なるを遂ぐ。乃ち五月初二日に於いて、朕が長子見済を冊して皇太子と為し、其の母杭氏もて皇后と為す。大本 既に正され、彝倫 亦た明らかなり。親親の義は、尤も當に取るべき所なり。太上皇帝の長子もて特に更めて封じて沂王と為し、次子見清もて榮王と為し、見淳もて許王と為す。同じく國家に屏たりて、宗社を衛安さす。爰に恩を遠邇（遠近）に推し、庸^もって弼を臣民に資^とる、所有^{あら}ゆる合に行なうべきの事宜、後に條列す[……]於^あ虧^あ、綱常 正しく、家道 雍^もす。式^もって弘く化本（教化の本）敦く、儲副（太子）專にして、國統 續けり。永しえに基圖（皇位）を固くせんことを庶い、臣民に布告して、予が至懷を體せよ、と（『大明英宗法天立道仁明誠敬昭文憲武至德廣孝睿皇帝實錄』 卷二百十六・廢帝鄺戾王附錄第三十四・「景泰三年五月甲午（二日）」条）。

[景泰三年五月甲午（二日）]、杭妃を冊立して皇后とし、景泰帝の長子の見済を皇太子とする。そして天下に詔してつぎのようにいう。朕（景泰帝）は、涼薄（淺薄）の躬でありながら、危急存亡に際して、天地祖宗の眷佑（加護）^{さかん}の隆なるに頼り、母后・臣民の付戴の重きをうけて、帝位を繼承した。國家を堅固にしようとして、繼承して難局を引き受けたのである。どう

して皇太子の廃止・擁立を考慮しなければならないのだろうか。しかしながら皇親・公侯・駙馬伯及び在廷の文武の群臣などが合同して上請して、「天 下民を佑け、之が君と作す」(『書經』泰誓上)、實に四海を安寧無事にし、父は天下を有ち、これを子に伝える。これこそ万年を強固にするものであり、三代の聖謨(貴い教で、ほんとうに百王の懿範(美しい道德規範))であります、という。朕(景泰帝)の長子は、年齢の順序でいうと先に在る。そこで皇太子の継承を正しくし、継位の事をはっきりさせるべきである。[そこで]聖母にお伝えしたところ、すみやかに民意に応ずるようにお考えを示された。さらに、皇后は謙虚であり、自分の皇后の位を景泰帝の長子の見済の生母である杭妃に譲りたいと再三願ひ出た。こうしたことから[皇太子と皇后の廃立は]、皇太后のお教えにしたがい、皇后の切なる願ひを遂げることになるのである。すなわち五月初二日に於いて、朕(景泰帝)の長子を見済を冊して皇太子とし、其の生母の杭氏を皇后とする。そうすることで、大本は正され、彝倫(常道)も亦た明らかなり。親親の義は、もっとも取るべき所であるから、太上皇帝(英宗)の長子で[これまで皇太子であった見深を]特にあらためて沂王に封じ、次子を見清を榮王とし、見淳を許王とする。同じく國家の藩屏として、宗社を安定させる。ここに恩を遠近におして補佐を臣民に求めたい。[…以下であらゆる行なうべきことを列挙する…] ああ、綱常 正しく、家道 調和する。それでもって弘く化本(教化の本)が敦くなり、皇太子 專にして、國統が つづくことになる。永遠に基圖(皇位)を固くせんことを庶い、臣民に布告して、予(景泰帝)が至懷(気持ち)を理解せよ、という。

また、『實錄』は、当日の夜に流星があったと記録する。

夜、流星の大なること如杯の如き有り、色赤く光有り。文昌(主に文運をつかさどると考えられた星座の名)の西北に出で行きて游氣に至る(『大明英宗法天立道仁明誠敬昭文憲武至德廣孝睿皇帝實錄』卷二百十六・廢帝郕戾王附錄第三十四・「景泰三年五月甲午(二日)」条)。

その翌日には、皇太子から官僚に特別賞与がふるまわれた。

[景泰三年五月]乙未(三日)皇太子の令旨(命令)もて文武の官員の一品と二品に各々銀四十兩・紵絲三表裏、三品に各々銀三十兩・紵絲二表裏、四品に各々銀二十兩・紵絲二表裏、五品に各々銀十五兩・紵絲二表裏、六品と七品に各々銀十兩・紵絲一表裏、八品と九品と庶吉士に各々銀五兩・紵絲一表裏、常朝に係らざる京官及び僧道の官に各々銀二兩・絹一疋、將軍に各々銀一兩、監生並びに順天府學の生員に各々絹一疋、軍校・勇士・力士・廚役に各々銀五錢、辦事官吏と當該の吏典と人材と知印と承差と樂武(舞)生・軍民匠・醫士・樂人・陰陽生・養馬・小廝・坊廂里老人等に各々布一疋、山東と河南と江北と直隸並びに北直隸の衛所の官軍の在京にて操備者官に各々銀二兩・絹一疋、旗軍に各々銀五錢を賞す(『大明英宗法天立道仁明誠敬昭文憲武至德廣孝睿皇帝實錄』卷二百十六・廢帝郕戾王附錄第三十四・「景泰三年五月乙未(三日)」条:『國榷』(卷三十・代宗景泰三年・「代

宗景泰三年五月乙未（三日）」条・一九二九頁）では「乙未（三日），文武の官吏・諸生・軍匠等到大賚（重賞）す」とある）。

さらに、『實錄』では、日時は記載されていないが、この五月に陳循・高穀・江淵・王一寧・蕭鎡・商輅に黄金十両が下賜されたと伝える。

是月（景泰三年五月），大學士の陳循・高穀，學士の江淵・王一寧・蕭鎡・商輅に各々黄金五十兩を賜う（『大明英宗法天立道仁明誠敬昭文憲武至德廣孝睿皇帝實錄』卷二百十六・廢帝郕戾王附錄第三十四）。

以上のように『實錄』では、黄金を下賜したことや爵位を贈ったことは記載されているが、それを皇太子の変更とはっきりとは関連付けてはいない。それらを関連させて説明を行なっているのは、李賢（字は原德，号は浣齊，諡は文達。河南鄧州の人。永樂六年（一四〇八）～成化二年（一四六六）。宣德八年癸丑科（一四三三）二甲二十一名の進士）である。李賢は、『天順日録』⁶⁾（拙稿では、『續修四庫全書』史部・第四三三冊所収の嘉靖十二年〔一五三三〕刻明良集本を用いる）において、つぎのように述べている。

景泰〔帝〕太子を易えんと欲し、文武大臣の従わざるを恐れ、先ず其の左右もて閣下の諸學士に啖わし、各々金五十兩・銀之に倍するを賜う。陳循の輩は、唯だ惠を感じるを知るのみにして、遂に太子を以て易う可しと爲す。是に於いて假りて外僚の陳奏を以て太子を易えんことを謀る。乃ち文武の群臣の其の可否を議するに會し、以て不可と爲す者を執え、即ち利害を以て之を愴うこと有れば、一人の敢えて辭を異にする無し。是に於いて日を擇びて之を立つ。即ち宮僚の美秩を以て之に付し、閣下其の取る所に任す。文武の大臣の與かる者は、十の七八、公孤（三公と少師，少傅，少保。ひろく重臣を指す）より下は數十人，太保と爲る者は十人なり。名爵の濫ること一に此に至る。惟だ〔李〕賢等

6) 『四庫全書總目提要』は、『天順日録』についてつぎのようにいう。

天順日録一卷浙江汪啟淑家藏本

明・李賢撰。〔李〕賢，字は原德，鄧州の人なり。宣德癸丑の進士（宣德八年癸丑科〔一四三三〕二甲二十一名の進士）。景泰の初め文選郎中より兵部右侍郎に超拜され，吏部に轉ず。英宗復位し，翰林學士を兼ね，文淵閣に入直す。歴官して華蓋殿大學士たり。文達と諡さる。事蹟は『明史』本傳に具わる。是の録は手に隨いて記載す。天順の時事に於いて頗る詳し。史に稱すらく三楊（楊士奇・楊榮・楊溥）より以來，君を得ること〔李〕賢の如き者は無しと。然れども郎署より知を景帝（景泰帝）に結び，侍郎に超擢さるるも，著する所は顧だ景帝（景泰帝）を謂いて荒淫と爲す。今，此の録を觀るに景帝に於いて一に則ち曰く，荒淫度を失う，と^①。再び則ち曰く，荒淫に流る，と。毀詆頗る實を失う。史の譏る所は，蓋し即ち此れを指す。又た謂う學士の王文と太監の王誠とは，襄王の子を取りて東宮と爲さんことを謀る。昌平侯の楊洪君父の難を急がず。寇の宣府に薄るに當りて，驚き惶れ措く無し。門を閉じて出でず，と。頗る正史と合わず。葉盛・岳正・羅倫の諸人の事に至れば，諱みて言わず。其の他の事も亦た概して未だ紀及せず。皆な未だ愛憎の見を免れず。然れども日久くして論定まり。是非も亦た曷ぞ掩う可けんや（『四庫全書總目提要』卷五十三・史部九・雜史類存目二・「天順日録一卷」条）。

① 『天順日録』に「……上（英宗）既に回鑾し南城に入る。天下人心の慕向（思慕向往）衰えず。景泰〔帝〕淫蕩の度無きに及び，臣民失望す……」（『天順日録』不分卷・一葉）。

の侍郎四五人は與からず。一易の後、人情 悵然として平らかならず。其の利を貪る者は、楊揚^{ママ}として自ら以て榮幸と爲す。[しかし、彼らは]識者 已に其の後を善しとするの計に非ざるを知るとするを知らず。而して天道 一還し、盡く革まりて遺す無し。因りて譴謫さるる者 亦た多し。回視するに與からざる者は、反って愧ずる有り。榮辱 相い^{ひきつづ}尋くと此の如し。士の立身 審らかならざる可きなり(『天順日録』不分卷・八十六葉～八十七葉)。

景泰帝は、皇太子をかえようとした。だが、文武大臣が認めようとしなことを恐れて、まずまわりの學士に金五十兩・銀百兩を下賜した。陳循などは、それを恩情として、皇太子をかえるべきだとした。そこで、外官(廣西土官都指揮使の黃玠)の進言を口実として、皇太子の変更を謀った。そして、文武の群臣がその可否を議論する際には、不可とする者をつかまえて、利害をもって誘導したため、誰も反対意見を述べなかった。そうしておいて、日時を択んで新しい皇太子を立てた。そのうゑに官僚には報奨を付して、その人たちの取るにまかせたのである。文武の大臣の十のうち七八が、重臣より以下は数十人がそれにあづかった。爵位の氾濫したのはここにきわまった。ただ私(李賢)などの侍郎四五名は、それにあづからなかった。この変更の後、人々の気持ちは平らかでなくなり、その利を貪った者たちは、榮幸とした。しかし、識者が後の事を考えるとよい策ではないことを知っていたことは理解していなかった。英宗が復辟し、すべてが完全に改められた。そのため官位を下げられたものは多かった。また、皇太子の変更にかかわったもののその処分にあたって思い出されもされなかったものは、かえって恥ずかしいことだとした。榮辱がひきつづき起こることは、このようなものである。処世は困難なものである、という。

李賢によれば、景泰帝は、皇太子の変更を認めさせるために、まず黄金を下賜した。そして、自分の子を皇太子に立てることに成功した時、爵位を濫発したというのである。

また、陳建の『皇明歴朝資治通紀(皇明通紀)』(嘉靖三十四年(一五五五)陳建序)は、つぎのようにいう。

[景泰三年五月]一日、詔もて皇子見済を立てて皇太子と爲し、生母杭氏を皇后と爲す。皇后汪氏を廢して別宮に居く。改めて上皇(英宗)の長子の皇太子(見深:後の憲宗成化帝)を封じて沂王と爲し、次子の見清を榮王と爲し、見淳を許王と爲す。易儲の詔草は、陳循の筆なり。廷臣に俱に官僚もて少傅を兼ねるを命ず。尚書の王直・胡濙は太子太師を兼ね、少保の陳循・高穀・于謙は太子太傅を兼ね、兵部尚書の儀銘・刑部尚書の俞士悅・左都御史の楊善・王文・王翱は並びに太子太保を加え、内閣侍郎の江淵・蕭鑑・王一寧は並びに太子少師を加う。學士の商輅は兵部右侍郎に進め、左春坊大學士を兼ね。餘は盡く紀す能わず。是れより先、帝(景泰帝)太子を易えんと欲し、文武大臣の従わざるを恐れ、太監の王誠・舒良と謀り、先ず閣下の諸學士に啖わし、各々金五十兩・銀一百兩を賜う。陳循の輩は、惟だ恵を感じるを知るのみにして、遂に太子を以て易う可しと爲す。時に廣

西思明府知府の黃珮の庶兄の黃玠 捍禦（防衛）するの功を以て累官して廣西都指揮使たり。[黃] 玠 嫡を奪わんと欲し、陰かに謀りて人をして[黃] 珮を殺さしむ。巡撫廣西・刑部侍郎の李棠と總兵都督僉事の武毅 [黃] 玠の情罪（罪状）を發し、獄に置き死[罪]に當つ。[黃] 玠 帝（景泰帝）の意は儲を易えんと欲し、人の先發無きを知り、乃ち人を遣りて京に赴かせ、先ず事を用いる者に賂し、然る後に上疏し、太子を易えんことを請う。[疏文は] 禮部に下され、多官を會して議せしむ。陳循等は覆奏を將^もって署名し、王直は難色有り。[陳] 循 筆を持して半跪を作す。[王] 直 已むを得ず、亦た署す。給事中の李侃 衆に對して灑泣（涙をはらう）し、都給事中の林聰・御史の朱英 陳べて不可とするも、止むる能わず。奏 上つられ、憲廟（見深：後の憲宗成化帝）出でて沂邸に就く。而して見濟 立つ。是に於いて升賞（賞与）太はだ濫^{みだ}りなりて、「滿朝は皆な太保、一つの部に^{ふた}の尚書あり」の謡有り。王直 賜う所の元寶を得て、案（テーブル）を扣き頓足（足を踏みならす）し、歎じて曰く、此れ何等の大事。乃ち一の蠻夷に出で。吾が輩愧じ死せん、と。累疏して退くを求む。然れども[李] 侃 詹事府丞に升り、[林] 聰 右春坊司直に升る。皆な辭せざるなり。[黃] 玠 大赦を以て原免（赦免）され、復職し、尋いで都督に升る。[武] 毅 事を以て降黜（降職処分）され、[李] 棠は此れに因りて致仕す。上皇（英宗）の復位するに及び、[黃] 玠は藥を飲みて死す。棺は斲^{むちう}られ屍は鞭たる。子の[黃] 政等は皆な誅に伏す（『皇明歷朝資治通紀（皇明通紀）』卷之十六・景皇帝紀・「壬申景泰三年五月一日」条）。

景泰三年五月一日に、景泰帝の子の見濟を立てて皇太子とし、生母の杭妃を皇后とし、それまでの皇后の汪氏を廢して別宮に移した。それまで皇太子であった英宗の長子の見深（後の憲宗成化帝）を封じて沂王とし、次子の見清を榮王とし、見淳を許王とした。新皇太子を立てる詔は、陳循の筆になる。[昇任人事については] 尚書の王直・胡濙は太子太師を兼ね、少保の陳循・高穀・于謙は太子太傅を兼ね、兵部尚書の儀銘・刑部尚書の俞士悅・左都御史の楊善・王文・王翱は並びに太子太保を加え、内閣侍郎の江淵・蕭鎡・王一寧は並びに太子少師を加えられた。學士の商輅は兵部右侍郎に進め、左春坊大學士を兼ねた。それ以外はくわしく述べられないほどである。[変更の経過については] まず景泰帝は、皇太子を自分の子にかえようとした。だが、文武大臣が認めようとしないことを恐れて、宦官の王誠・舒良と謀って、學士に金五十兩・銀百兩を下賜した。陳循などは、それを恩情として感激するのみで、皇太子をかえるべきだとした。そこで、外官（廣西土官都指揮使の黃玠）の進言を口実として、皇太子の変更を謀った。その時、廣西思明府知府の黃珮の庶兄の黃玠は、防衛による功績で昇進して廣西都指揮使となっていた。黃玠は黃珮の嫡を奪おうとして、ひそかに謀って黃珮を殺した。巡撫廣西・刑部侍郎の李棠と總兵都督僉事の武毅は、黃玠の罪状を發して、獄に置いて死罪にあたりとした。黃玠は、景泰帝は皇太子の変更を望んでおり、まだ誰も願い出た者がいないことを知り、人を遣って、当事者に賄賂した後に上疏して皇太子の変更を願い出た。その疏文が禮部に下され、多くの官

僚を集めて議論が行なわれた。陳循などは賛成に署名し、王直は難色を示した。陳循は、筆を持って半跪した。王直はしかたなくまた署名した。給事中の李侃は、みんなに向かって涙をほらい、都給事中の林聰・御史の朱英は不可であると云ったものの、止めることはできなかった。提案の疏がたてまつられて、皇太子の英宗の長子の見深（後の憲宗成化帝）は沂王に封ぜられて、出でて沂邸に就いた。こうして景泰帝の太子の見済が皇太子に立てられた。そして昇任人事が氾濫されて、「滿朝は皆な太保、一つの部にふたりの尚書あり」の謡が行なわれた。王直は下賜された元寶を持って案（テーブル）を叩き足を踏みならし、嘆いて「こうした大事は、ひとりの蠻夷に出たのだ。吾が輩は愧じ死せん」という。たびたび疏して引退を願ひ出た。しかし〔反対の意思表示をした〕李侃は詹事府丞に、林聰は右春坊司直に昇進し、断らなかった。黄珪は、大赦をうけて赦免され、復職し、つづいて都督に昇進した。〔黄珪を摘発した〕武毅は、ある事にかこつけて降格され、李棠は此れによって退職した。英宗が復辟し、黄珪は薬を飲んで自殺し、棺は切られ屍は鞭たれた。子の黄政らは皆な誅に伏した、という。

さらに、薛應旂（字は仲常、号は方山。江蘇武進の人。嘉靖十四年乙未科（一五三五）三甲三十三名の進士）の『憲章錄』（萬曆二年〔一五七四〕陸光宅刻本）になると、皇太子の変更を認めさせるために、金銀を下賜したうで、爵位をあたえたという。

帝（景泰帝）太子を易えんと欲し、文武大臣の従わざるを恐れ、太監の王誠・舒良と謀り、又た内閣の諸學士に啖わし、金五十兩・銀一百兩を賜う。廷臣に宮僚を俱兼するを命じ、王直・胡濙は太子太師を俱え、陳循・高穀・于謙は太子太傅なり、儀銘・俞士悦・楊善・王文・王翱・何文淵は太子太保なり、蕭鎡・王一寧は並びに太子少師なり、商輅は兵部左侍郎兼春坊大學士と爲りて、滿朝 恵を感じ、遂に太子を以て易う可しと爲す〔以下では、黄珪の提案から皇太子の変更^{ママ}にいたる経緯について述べる。それを以下で見る王世貞は「而して黄珪（珪）の邪議 起こる」と要約する〕（萬曆二年〔一五七四〕陸光宅刻本『憲章錄』卷二十六・二十一葉）。

景泰帝は、皇太子を自分の子にかえようとしが、文武大臣が認めようとしなことを恐れて、宦官の王誠・舒良と謀って、内閣大學士たちに金五十兩・銀百兩を下賜した。王直・胡濙は太子太師を、陳循・高穀・于謙は太子太傅を、儀銘・俞士悦・楊善・王文・王翱・何文淵は太子太保を、蕭鎡・王一寧は太子少師を与えられ、商輅は兵部左侍郎となって春坊大學士を兼ねるようになった。朝を挙げて恩恵を感じ、とうとう皇太子を変更するべきだ、となった。そうしたところ黄珪の提案があった、という。

ただし、王世貞は、『弇山堂別集』（萬曆十八年〔一五九〇〕陳文燭序）において、『憲章錄』のこの条を引用し、つぎのようにいう。

此れ大いに誤漏有り。内閣の銀を賜うは易儲の先に在り、而して黄金を賜うは易儲の後に在り。諸公の師傅を加えらるるは、正に易儲の命と同日に下る。所謂ゆる「滿朝感恵（滿朝 恵を感じ）」に非ざるなり。當時、左都御史の王文・楊善は俱に先ず勞勩を以て太子

太保を加えらる。此の日を以て加えらるるに非ざるなり⁷⁾。其の他の太師を加えらるる者は、勳臣(功臣)は則ち陳懋・石亨なり。太傅を加えらるる者は、勳臣(功臣)は則ち柳溥なり。太保を加えらるる者は、武臣は則ち張輓なり、文臣は則ち陳鑑・石璞なり。少師を加えらるる者は、江淵なり。少傅を加えらるる者は、俞山なり。少保を加えらるる者は、俞綱・羅通・李錫・蕭維禎なり。而して今 皆な之を遺す。又た黄玠^{ママ}(玠)の議は先に在り、内閣を賞するは後に在り(『弇山堂別集』卷二十四・史乘考誤五)。

王世貞によれば、これはおおいに誤り漏れることがあるとする。つまり、内閣學士に銀を下賜したのは皇太子を変更する前であり、金を下賜したのは変更の後である。諸臣に太師太傅などの名誉職が加えられたのは、変更の詔と同日のことである。「朝を挙げて恩恵を感じ」、そのために皇太子の変更を提案したのではない。王文・楊善は、まず功績を認められて景泰三年一月十九日に太子太保を加えられている。変更の提案された日と同日ではない。そのほか、功臣で太師を加えられたのは、陳懋・石亨である。功臣で太傅を加えられたのは、柳溥である。太保を加えられたのは、武臣では張輓であり、文臣で陳鑑・石璞である。少師を加えられたのは、江淵である。少傅を加えられたのは、俞山である。少保を加えられたのは、俞綱・羅通・李錫・蕭維禎である。しかし、『憲章錄』ではこれらの人たちは記されていない。さらに、黄玠の提案は、先にあって、内閣學士に名誉職を与えたのは、後であるという。

たしかに、『實錄』を見る限りでは、事態の経過は王世貞の述べるとおりである⁸⁾。

なお、皇太子の変更の詔を擬撰した何文淵(字は巨川、号は鈍庵。江西廣昌の人。?～天順元年(一四五七)四月十四日。永樂十六年戊戌科(一四一八)三甲一百三十二名の進士)について、英宗『實錄』の「天順元年(一四五七)夏四月丁未(十四日)」条で、つぎのようなことを伝える。

[天順元年(一四五七)夏四月丁未(十四日)] 吏部尚書の致仕する何文淵 卒す。[何]文淵 字は巨川、江西廣昌縣の人なり。進士なりてより湖廣道監察御史に擢せられ頗る時

7) 『實錄』によると、王文と楊善とは、景泰三年一月十九日に、太子太保が加えられている。

[景泰三年正月癸丑(十九日)] 都察院右都御史の王文と掌鴻臚寺事左都御史の楊善を陞して俱に太子太保と爲す。兼職して任事すること故の如し(『大明英宗法天立道仁明誠敬昭文憲武至德廣孝睿皇帝實錄』卷二百十二・廢帝邸辰王附錄第三十・「景泰三年正月癸丑(十九日)」条)。

8) 清・夏燮(字は謙父。安徽當塗の人。嘉靖五年[一八〇〇]～光緒元年[一八七五])の『明通鑑』(清・同治十二年[一八七三]宣黃刊本)の「攷異」も、

[攷異] 弇州の考誤(『弇山堂別集』卷二十四・史乘考誤五)に謂う、陳循等六人 白金を賜うは前に在り。廢立の事 定まるに迨び復た閣臣に黄金各々五十兩を賜う。『憲章錄』は以て金・銀を賜うは同じく一時に在りと爲す者は非なり、と。今、按ずるに『明史』(卷一百六十八・列傳第五十六)陳循傳に「先ず[陳]循等に白金百兩を賜う。[廢立の]詔を下すに比び、[陳]循等 遂に敢えて諍わず、兼官を加えらる。踰月、復た[陳]循等六人に黄金五十兩を賜う」と。「踰月」とは、即ち五月の廢立の日なり。此れに据れば、則ち白金を賜うは易儲の先に在り。黄金を賜うは易儲の後に在り。『御撰資治通鑑綱目三編』三編の次序も亦た是れ此の如し。此れ皆な『實錄』に据る(『明通鑑』卷二十六・「五月甲午」条「攷異」・五葉)。という。

名有り。宣德庚戌（宣德五年〔一四三〇〕），用薦もて温州府知府に陞り，璽書を賜う。任に抵るに，〔何〕文淵の撫治（統治）に術有り。郡人 驩然（^{ひさしくして}楽しむ）として其の賢を稱す。正統中，用薦もて起こされて刑部右侍郎と為る。久之，疾を以て休致を乞う。〔正統〕十四年，學士陳循 其の才を薦め，詔もて起こされて吏部左侍郎と為る。景泰の初め，尚書に陞り^①，尋いで太子太保を加えらる^②。時に中官の興安 任事（事務を担当する）す。〔何〕文淵 舊日の稔熟（熟知）を以て毎に其の勢を彰にし，且つ行事 陰險なり。物論（輿論）容れず，都給事中の林聰等の劾する所と為り，致仕を命ぜらる。上（英宗）復位し，加官を革去さる。〔何〕文淵 自から太子を易うるを議するに與かり，首に「父有天下，傳於子（父 天下を^{たも}ち，子に傳う）」の言を發するを以て，奇禍有るを慮る。時に副都御史の陳泰 廣東按察副使に左遷され，道〔何文淵の出身地の〕廣昌を経るに，人の〔陳〕泰が來りて〔何〕文淵を抄提すと傳うる者有り。〔何〕文淵 懼れ，即ち自經して死す。後に人の奏する所と為り，差官して槨を啓き之を驗するに果して然り（『大明英宗法天立道仁明誠敬昭文憲武至德廣孝睿皇帝實錄』卷之二百七十七・「天順元年（一四五七）夏四月丁未（十四日）」条）。

①『明史』（卷一百十一・表第十二・七卿年表一）によれば，景泰二年七月～景泰四年六月まで吏部尚書。

②『明史』（卷一百十一・表第十二・七卿年表一）によれば，景泰三年四月に太子太保を加えらる。

退職していたもとの吏部尚書の何文淵が亡くなった。何文淵は，字は巨川，江西廣昌縣の人である。進士になり，湖廣道監察御史に擢せられ，たいへん名声があった。宣德五年（一四三〇），推薦されて温州府知府に陞り，璽書を賜わった。在任中の何文淵の治め方には法度があった。郡人は，よろこんで，その賢を称した。正統中，推薦されて刑部右侍郎に起用された。しばらくして，疾のため辞職した。正統十四年（一四四九）に學士の陳循が その才を推薦して，詔が出されて吏部左侍郎に起用される。景泰の初め（景泰二年七月）に，吏部尚書に陞る，ついで〔景泰三年四月に〕太子太保を加えらる。時に宦官の興安が，事務を取り仕切っていた。何文淵は，興安と旧知の間がらであったことから，いつもそれを称賛した。また，何文淵は行ないが陰險であった。そのため輿論が非難し，都給事中の林聰などが弾劾する所となり，致仕を命ぜられた。英宗が復辟し，太子太保を削られた。また，何文淵は自身で皇太子の変更の提案に参画し，最初に「父 天下を^{たも}ち，子に傳う」と発言したため，思わぬ禍があることをおもひばかった。時に副都御史の陳泰が廣東按察副使に左遷され。陳泰が，道を〔何文淵の出身地の〕江西廣昌に取った。その時，陳泰が何文淵を逮捕しに來たと伝える者がいた。そのため懼れ心配して自縊して亡くなった。後にその事が上奏され，役人が派遣されて，確かめさせたところ，はたしてそうであった，という。

また，英宗『實錄』の「天順二年（一四五八）秋七月丁亥（二日）」条には，つぎのようにいう。

初め，太子太保兼吏部尚書の何文淵，景泰の時に在りて，言官 其の貪縱を論ずるに因り，^{みず}自から已に皇儲を廢立するの功有り，〔それは〕詔書の云う所の「父 有天下を有ち，之

を子に傳う。『天 下民を佑け、之が君と作す』(『書經』泰誓上)なり、と言う。實に已に屬對し釋罪(赦免)を得て致仕す。上(英宗)の復位するに及び、[何]文淵 懼れて縊死す。致仕する知府の掲稽は、[何]文淵の受業の弟子なり。是に至り人をして京に至らしめ、其の事を發し、并せて其の子の南京禮部主事の[何]喬新等の諸々の不法を擧げて云うに「[何]文淵の死するは、寔に諸子の逼り以て禍を脱すればなり」と。是に於いて、[何]喬新の輩(輩) 亦た人をして[掲]稽 侍郎と為りて廣東に鎮守せし時、黃^{ママ}紘(紘)に代わりて易儲の疏を為す、と告げしむ。章(上奏章告發) 俱に上つられ。上(英宗) 怒り、錦衣衛を遣りて[掲]稽等を官收し、京に赴かせ、之を鞠す(『大明英宗法天立道仁明誠敬昭文憲武至德廣孝睿皇帝實錄』卷之二百九十三・「天順二年(一四五八)秋七月丁亥(二日)」条)。

何文淵は、景泰の時に、言官によって貪欲放縱であると告発されると、[釈明して]皇太子の廢止・變更に功績があった、それは廢立の詔に「父 有天下を有ち、之を子に傳う。天 下民に佑し、之が君と作る」と擬撰したことであったと自分から言った。そして、皇帝の面前で申し開きを行ない、許されて致仕した。英宗が復辟して、何文淵はおそれて縊死した。退職した掲稽は、何文淵の学生であった。ここにいたって、人を北京に派遣して、何文淵のこれまでの行ない、その子の何喬新のさまざまな不法行為を告発して、何文淵が亡くなったのは、子供たちが禍を避けるために逼ってそうさせたためである、と述べさせた。そこで、何喬新たちは、人を遣って、掲稽が廣東在任中に、黃^{ママ}紘に代わって皇太子の廢止・變更の疏を書いた、と告発させた。告発文がそろって奉られ、英宗は怒り、錦衣衛を派遣して掲稽などを拘束し、このことを尋問させた、という。

なお、陳建の『皇明歷朝資治通紀(皇明通紀)』(嘉靖三十四年(一五五五)陳建序)では、「之を鞠す」に続けて、

跡涉 已往なれば、俱に釋さるるを獲(『皇明歷朝資治通紀(皇明通紀)』卷之十七・英宗睿皇帝紀・「丁丑天順元年三月」条)：『憲章錄』(萬曆二年〔一五七四〕陸光宅刻本)卷二十八・十葉・「天順元年三月」条も同文)。

とある。

また、孝宗『實錄』の「弘治十五年十二月庚申」条にも、つぎのようにいう。

致仕する刑部尚書の何喬新 卒す。……初め、景泰(景泰帝) 皇儲を^か易えんことを謀り、草詔せしむ。大學士の陳循 起句に云う、「天 下民を佑け、之が君と作す」(『書經』泰誓上)と、而して對[句]に^{くる}窘しむ。[何]喬新の父の吏部尚書の何文淵 適たま側に在り。即ち應聲して曰く、「父 天下を^{たも}有ち、之を子に傳う」と。天順の改元に迫り、[皇太子を] ^か易えんことを謀るに與かる者は、多く斥逐され罷歸す。[何]喬新 時に刑部主事と為る。黃^{ママ}紘(紘)・徐正の處するに極刑を以てするを見るに困り、禍の己に及ばんことを恐れ、乃ち書を貽りて其の父に自から引決するを勸む。[何]文淵 果して自盡す。是

(士) 論 之を恥ず、と (『大明孝宗建天明道誠純中正聖文神武至仁大德敬皇帝實錄』 卷一百九十四・「弘治十五年十二月庚申」条)。

王世貞は、まず孝宗『實錄』のこの個所をつぎのように引用する。

史 (『實錄』) は、「何文肅公喬新卒 (何文肅公喬新 (何喬新) 卒す)」條の下に於いて、[以下のように] 謂う⁹⁾。景泰の初め皇儲 (皇太子) を易^かうる草詔 (詔書の草稿) に、大學士の陳循 [の擬した] 起句は「天 下民を佑け、之が君と作^なす (天祐下民、作之君)」(『書經』泰誓上) と云う。其の時の吏部尚書の何文淵 適々側に在り、即ち應聲 (すぐに応じて) して「父 天下を有ち、之を子に傳う (父有天下、傳之子)」と曰う。天順の改元に迫り、謀に與かる者は多く斥逐さる。[何] 喬新 時に刑部主事と爲り、黃竑 (珙)・徐正の處せらるるに極刑を以てするを見るに因り、禍の已に及ぶを恐れ、乃ち書を貽りて其の父に引決 (自殺) を勧む。[何] 文淵 果して自盡す。士論 (輿論) 之を恥ず、と (『弇山堂別集』卷二十四・史乘考誤五)。

孝宗「實錄」の「何文肅公喬新卒」条に、以下のように述べている。景泰年間のはじめ、皇太子変更の詔の下書きに大學士の陳循は「天 下民を佑け、之が君と作^なす (天祐下民、作之君)」(『書經』泰誓上) と最初の句を書いた。その時、吏部尚書の何文淵が側にいてすぐに「父 天下を有ち、之を子に傳う (父有天下、傳之子)」という。英宗が復辟して、皇太子変更に関係したものはおおく退けられた。何喬新はそのとき刑部主事であり、黃竑・徐正が極刑に処せられたのを見て、わざわざ自分に及ぶことを恐れ、書をおくって父の何文淵に自裁することを勧めた。そして何文淵は自盡した。輿論はこれを恥ずかしいことだとした、という。

そして、王世貞は「天順錄」(この記述は、いまのところ『天順日錄』には見当たらず、『實錄』に見えるので、この「天順錄」は、『實錄』のことだと考えられる) を引用し、つぎのようにいう。

此れ亦た焦泌陽 (焦芳: 字は孟陽, 字は守靜。河南泌陽の人。? ~ 正徳十二年 (一五一七)。天順八年甲申科 (一四六四) 二甲三十九名の進士) の懟筆 (怨恨に出た記載) なり。正徳中、史を柄する者 力めて其の誣を辨ずるを爲す。然れども之を「天順錄」に攷えるに [以下のように] 云う。致仕の後、上 (英宗) 復位し、宮保 (太子太保) を革^{あらた}めらる。[何] 文淵 自ら太子を易^かうるを議するに與かり、首に「父 天下を有つ」の言を發するを以て、奇禍有るを慮る。時に副都御史の陳泰 廣東按察副使に左遷さる。[陳泰が] 道 廣昌を

9) 武宗『實錄』の「正徳十三年八月庚寅 (二十三日)」条に、何喬新に「文肅」と諡することが決まり、それに関連して、

[正徳十三年八月] 庚寅 (二十三日)、故刑部尚書の何喬新に追諡して「文肅」と曰う。…[その決定の] 詔に [何] 喬新 學行 俱に優れ、始終 全徳あり。太子少傅を贈り仍お諡を與う。公論 是に至りて始めて定まれり。而して先朝の『實錄』の本傳に「[何] 喬新 議法刻深にして父に引決を勧め以て自から全うするに及ぶ」と謂うは、蓋し焦芳の曲筆に出ず^{とが}云う、と (『大明武宗承天達道英肅睿哲昭徳顯功弘文思孝毅皇帝實錄』 卷之一百六十五・「正徳十三年八月庚寅 (二十三日)」条)。

と詔が出されている。

經るに、人の〔陳〕泰が來りて〔何〕文淵を抄提すと傳うる者有り。〔何文淵〕懼れ、即ち自縊して死す。後、人の奏する所と爲り、差官 柳を啓きて之を驗するに、果たして然り、と。則ち〔何〕文淵に引決（自殺）を勸むの説は誣にして、自盡の説が實なり。〔また、〕野史 以て江淵に出づと爲すも¹⁰⁾、大槩 文勢を以て之を攷えるに、恐らくは先に「父有天下、傳之子（父 天下を^{たも}有ち、之を子に傳う）」有りて、「天降下民、作之君（天 下民を降し、之が君と^な作す）」（『書經』泰誓上）を借り以て之に對するのみ。又た〔何〕文淵 四月を以て卒す。而して黃^{ママ}玠（玠）・徐正は五月を以て誅せらる。大抵 未だ信ず可からず（『弇山堂別集』卷二十四・史乘考誤五）。

こうしたことは焦芳の怨恨に出た記載である。正徳年間になると、つとめてその誣告であることが述べられている。しかし、『天順錄』によると、何文淵は、辭職した後、英宗が復辟し、あたえられた太子太保の名誉職を取り消されている。何文淵は、自身で皇太子の変更の提案に参画し、最初に「父天下を有つ」と発言したため、思わぬ禍があることをおもひばかった。時に副都御史の陳泰が廣東按察副使に左遷され。陳泰が、〔何文淵の出身地の〕江西廣昌を通り過ぎた時に、陳泰が何文淵を逮捕しに來たと伝える者がいた。そのため懼れ心配して自縊して亡くなった。後にその事が上奏され、役人が派遣されて、その事を確かめさせたところ、はたしてそうであった、という。そうであるならば、何文淵が自殺を勧められたというのは誣告であり、自盡したというのが事実である。野史（趙善政の『賓退錄』のことか）は、江淵（字は世用。四川江津の人。宣徳五年庚戌科（一四三〇）二甲三十名の進士）がこの二句を書いたとする。しかし、文勢から考えてみると、先に「父有天下、傳之子（父 天下を^{たも}有ち、之を子に傳う）」の語があり、そして『書經』の「天降下民、作之君（天 下民を降し、之が君と^な作す）」の語を借りて対とただけであらう。更にいうと、何文淵は四月に亡くなり、黃玠・徐正は五月に誅されている。大抵は信じることはできない、という。

また、李賢は何文淵の人となりをつぎのように伝える。

何文淵 温州に守たりし時、廉静寡慾にして、一郡 大いに治まる。當時の浙東の守 稱して第一と爲す……〔後に疾のため退職する〕……正統十四年、朝廷 多事にして、士大夫 交章し之（何文淵）を起こさんことを乞う。〔そして〕召して吏部侍郎と爲す。遂に尚書・太子太保に進む。其の人才を擢用するの際に於いて、詭譎の跡 始めて露わる。而らば言路に居る者 容るる能わず。百計もて固位（地位を保全する）すると雖も、之を攻むる者衆く、目して奸邪と爲し、其の情狀を暴して、斥去さるに終われり。留むる能わざるを奈何せん。向使に病もて去りて出ざれば、郡の清名を作し、必然として後に傳わり、

10) 管見の及ぶところ、趙善政の『賓退錄』に、

或いは曰く、〔「天降下民、作之君、父有天下、傳之子」の〕二語は、本とより〔何〕文淵の作に非ず。乃ち江淵の作なり、と（趙善政『賓退錄』卷二）。

とある。

廉謹の人爲るを失わず。今や高爵を得と雖も、其の美を喪う。何ぞ羨むに足らんや(『古穢集』卷三十・雜錄)。

何文淵は、温州知府であった時は、廉静寡欲で、一郡は大いに治まった。当時の浙東の知事の第一と称された。正統十四年に朝廷は多難となり、官僚読書人は何度も何文淵の再登用を願い出た。そして吏部侍郎に起用され、尚書・太子太保に進んだ。だが何文淵が人事を行なうにあたって、その狡猾さが明らかとなった。そして言官はそれを容認しなかった。何文淵は、あらゆる手段を講じて地位を保全しようとしたけれども、攻撃する人は多く、何文淵を奸邪であるとし、その実情をさらけ出し、排斥された。留まることができなかった事実はどう考えればよいだろうか。かりに疾のために退職したままであれば、知事として名声を得て、後世に伝えられ、廉謹の人であったとされていただろう。今では高位高官を得たというものの、その名声を無くしてしまった。どうして羨むに足りるであろうか、と李賢はいう。

英宗の復辟後、景泰帝と一線を画して、英宗のたいへんな知遇を得た李賢¹¹⁾の発言なので、いささか割り引いてみなければならぬかもしれない。しかし、ここまで言われるということは何文淵の行跡には問題があったのではないだろうか。

さらに、『憲章錄』には、景泰帝と太監の金英との間に、皇太子に関するつぎのような対話をあったと述べている(『菽園雜記』卷一もほぼ同じ)。

帝(景泰帝) 將に易儲せんとし、太監の金英に語^うけて曰く、七月初二日は東宮の生日なり、と。[金]英 叩頭して曰く、東宮の生日は是れ十一月初二日なり。帝(景泰帝) 之が爲に慚然たり。帝(景泰帝)の言う所の者は、[景泰帝の子の]見濟を謂うなり。[金]英の言う所の者は、[英宗の子で後の]憲宗を謂うなり。魏徵の獻陵の對と相い似たり(『憲章錄』卷二十六・「景泰三年五月」条・二十二葉)。

11) 王士禛(字は子眞、またの字は貽上、号は阮亭、晩年に漁洋山人と号す。山東新城の人。明・崇禎七年(一六三四)～清・康熙五十年(一七一)一)。順治十五年戊戌科(一六五八)二甲三十六名の進士の『池北偶談』は、李賢について、つぎのように述べる。

……[黃汝良(字は明起、又の字は寓庸、号は名起・易庵・毅庵。福建晉江の人。萬曆十四年丙戌科(一五八六)二甲十六名の進士の)の]『野紀』「曠搜」に又た云う「王文格(王鏊:字は濟之、又の字は守溪、諡は文恪。吳縣の人。景泰元年(一四五〇)～嘉靖三年(一五二四)。成化十年(一四七四)の解元、成化十一年乙未科(一四七五)の會元・探花)李文達(李賢)を評して云う『國朝三楊(楊士奇・楊榮・楊溥)の後、君を得るの最も久しき者は、李賢に如くは無し。亦た能く才猷(才能謀略)を展布(謂顯示本領、發揮才能)す。然れども當時亦た以て賄聞あり』云云と。文達(李賢)の相業(内閣大學士としての功績)は、三楊に視て有過ること有るも及ばざる無し。後に王(王鏊)亦た入閣するも、相業は如何。亦た自から其の睫を見ざる勿きか(『韓非子』「喻老」にもとづく:身近なことはかえって分からない)」と。頃ごろ施愚山(施閔章:字は尙白、号は愚山。安徽宣城の人。明・萬曆四十六年(一六一八)～清・康熙二十二年(一六八三)。順治六年己丑科(一六四九)二甲二十六名の進士/康熙己未科博學鴻儒科二等四名の進士)の史館に在りて作りし「文達列傳」を見るに、頗る微詞を致し、敢て然りと謂わず。施(施閔章)或いは未だ毅菴(黃汝良)の此の論を觀ざるのみ(『池北偶談』卷九・談猷五・「吳康齋李文達」条)。

景泰帝は皇太子を取り換えようとして、宦官の金英にいう。七月二日は、皇太子の誕生日である、と。すると金英は叩頭して、皇太子のお誕生日は、十一月二日でございます、と。このため景泰帝は慚然となった。ここで景泰帝という誕生日は、自分の子を見済を指し、金英のいったのは、後の憲宗のことを指していた。唐の魏徴の対話と似ている、という。

王世貞は、『憲章録』のこの対話を引用したうえで、「此れ野史に本づけば、據る可きに似たり」とするものの、これは時間的につじつまが合わず、おそらくは好事家の手に出たものであらうと考える。ただし、金英は、優秀であり、他の宦官とは比較にならないとする。

此れ野史に本づけば、據る可きに似たり。但だ之を史に攷えるに、景泰元年、上（景泰帝）

金英を怒り、其の結黨（徒党を組む）の市恩（恩を施す）を發し、家人（僕人）の中の鹽を縦にする等の事に及び、論斬（斬首の判決）及び戍謫を論ぜらるること差有り¹²⁾。[金]英 都察院の獄に下り、亦た罪斬を論ぜらるも、詔もて之を禁錮とし、[金]英の家 幾んど籍せらる。豈に東宮の生日の説 [金]英の未だ下獄の前に在らんや。或いは景帝（景泰帝）の怒るは此れに繇らんや。但だ其の時は帝（景泰帝）方に即位せんとし、殊に未だ易儲の念を萌さず、應に東宮の説有るべからざるなり。[金]英の赦出は、必ず三年の間に在り。當時、儲位 已に定まり、帝（景泰帝）何ぞ必ず復た東宮の生日を言わん。[金]英 猶お危疑の間に在りて、豈に敢えて此の對を作さんや。[金]英 能く南遷の議を斥く。又た能く此の對語を作すは、誠に凡品に非ず。但だ恐らくは好事なる者の因りて之に附會するのみ。然れども[金]英 嘗て南京に使いするに、獨り薛瑄 出でて見（まみ）えず。[金]英 使して廻り、景帝（景泰帝）見る所 誰が良しと爲す者なるかを問うに、[金]英が曰く、僅かに一の薛公（薛瑄）なるのみ、と。然らば則ち[金]英の賢 殆ど他の瑄の比に非ざるなり（『弇山堂別集』卷二十四・史乘考誤五）。

これは野史にもとづいており、確かなことのように思える。ただし『實錄』の記載から考えてみると、景泰元年に景泰帝は金英に対して怒りをあらわにし、その一党が恩を売ることから、家人（僕人）の鹽の販売を好き勝手に行なったことまでを告発し、金英の一党を斬首から戍謫までのそれぞれの処分にした。金英も都察院の獄に入り、斬を宣告されたものの、景泰帝が詔

12) 『實錄』には、つぎのように記録される。

〔景泰元年六月丁亥（十五日）〕都察院 奏すらく、司禮監太監の金英の家人の李慶等、官鹽を支（支給）されること多く、淮安府民の船六十餘艘を挾取して鹽を載せ、因りて船夫を杖死するに及び、[李]慶を絞に坐し、餘は俱に杖す。以て[金]英を劾せず、と。刑科給事中〔「國權」（卷二十九・「代宗景泰元年六月丁亥（十五日）」条・一八五九頁）では、「刑科給事中の張聰」と名前を挙げる〕は、[金]英 怙寵（寵を恃んでおごる）もて君を欺き、懷姦（心に奸詐を懷く）・稔惡（罪惡はきわめて重い）なり。左都御史の陳鑑・王文、監察御史の宋瑛・謝琚は、權を畏れ勢いを避け、長姦を縱惡（野放しにする）にす、と劾す。帝（景泰帝）曰く、[金]英は、朕（景泰帝）自から之を處せん。[陳]鑑等は其れ錦衣衛に命じて逮治（逮捕断罪する）せん、と。時に十三道監察御史も亦た[金]英を劾せざるを以て、罪に及ぶを恐れ、遽に上章して自伏すれば、皆な之を宥（ゆる）す（『大明英宗法天立道仁明誠敬昭文憲武至德廣孝睿皇帝實錄』卷之一百九十三・廢帝郕戾王附錄第十一・「景泰元年六月丁亥（十五日）」条）。

をだして禁錮とし、[金] 英の家財は大部分が没収された。皇太子の誕生日の対話は、この下獄の前にあったのだろうか。もしくは景泰帝が怒ったのはこの対話に原因したのであろうか。ただ景泰元年は景泰帝の即位したての頃であり、まだ特に皇太子の廃止・変更の気持ちは萌していない。この対話はあるはずはない。[もしもこの対話があったとするならば] 金英が赦された景泰三年までのあいだであろう。それ以後は、皇太子の変更は定まっており、景泰帝はどうして誕生日の事を持ち出さなければならなかったのか。また金英は自分が疑われていた[景泰元年の] 時に、あえてこの回答を行なうのであろうか。金英は、英宗が土木堡で捕虜になった時になされた南遷の提案を斥けている。さらにこうした対話を行なっているとしたならば、ほんとうに非凡である。ただ、おそらくは好事家の手に出たものであろう。だが、金英は、南京に使いした時、薛瑄だけが面会しようとしなかったことから、反対に景泰帝に薛瑄を推薦したことがある。やはり、金英は他の宦官とは比較にならないほどすぐれていたのである、と王世貞はいうのである。

ただし、新しく皇太子に立てられた景泰帝の長子の見済は、景泰四年十一月辛未（十九日）に亡くなってしまう。そして、「懷獻」という諡が贈られている。

皇太子見済 薨ず。「懷獻」と諡す（『大明英宗法天立道仁明誠敬昭文憲武至德廣孝睿皇帝實錄』卷之二百三十五・廢帝郕戾王附錄第五十三・「景泰四年十一月辛未（十九日）」条）。

[景泰四年十一月] 辛未（十九日）、皇太子見済薨ず。懷獻と諡す（『國榷』卷三十一・「代宗景泰四年十一月辛未」条・一九六八頁）。

すでに検討したように、皇太子の見済は、かぞえて八歳から五歳までの間に亡くなったと考えられる。

では、この「懷獻」の諡号はどのような意味を持っていたのであろうか。まず「懷」字については、『史記』正義に引く「諡法解」では、「義を執りて善を揚ぐるを懷と曰う」¹³⁾の意味とともに、「慈仁（仁愛）なるも短折するを懷と曰う」とある。陳逢衡は、『逸周書補注』で、次のように補注をつけている。

義を執りて善を揚ぐるを懷と曰う。『獨斷』同じ。『史記正義』に「懷」を「德」に作る。『通鑑』漢紀注に引きて「執義行善曰德」に作る。

孔[晁]注：人の善を稱す。

補注：春秋の時、晉に懷公圉・陳に懷公柳有り。『爾雅』釋詁[下]に「懷は、止なり」と。義に止まる故に「義を執る」なり。『詩』周頌[時邁の「懷柔百神」]条の毛傳・集傳の注に「懷は來」なり、と。能く衆善を來らす、故に「善を揚ぐ」。

慈仁（仁愛）なるも短折（夭折）するを懷と曰う。『後漢書』の「章德竇皇后」の諡を恭懷とするに注して諡法の「慈仁（仁愛）折（夭）行を懷と曰う」を引く。

13) 朱右曾の『逸周書集訓校釋』六・諡法第五十四・「執義揚善曰懷・慈仁短折曰懷」条に、「揚は、稱なり」と注がある。この注によると「義を執りて善を揚ぐるを懷と曰う」となる。

孔[晁]注:短は,未だ六十ならず。折は,未だ三十ならず。注に訛有り。説は「短折不成曰瘍」の下に見す¹⁴⁾。

補注:其の徳 人に在るも,大年の享無し。故に黎民 之を懷く(『逸周書補注』卷十四・二十九葉・「執義揚善曰懷」/「慈仁短折曰懷」条)。

陳逢衡によれば,「義に止まり,多くの善をもたらす」・「徳を有しているものの若死にしてしまう」という意味となる。

蘇洵の「諡法」には,

慈行なるも短折するを懷と曰う。

位を失いて死するを懷と曰う。

新たに改む。古に晉の懷公圉・欒懷子盈・楚懷王は,皆な國を失いて其の民 之を悲しむを以ての故に諡して「懷」と曰う。未だ能く[未]來を懷うを以て諡して「懷」と曰う者有らざれば,則ち人の懷うを以て諡して懷と為すの思いを主として懷なり(「諡法」卷四・「懷二」条)。

という。「諡法」の「義を執りて善を揚ぐるを懷と曰う」を,「位を失いて死するを懷と曰う」に改めている。蘇洵の「諡法」によると,「徳を有しているものの夭折する」ことや「位を失って亡くなる」ことを「懷」の意味としている。

また、『通志』諡略では,「懷」字を,「中諡法」の十四字の中の一文字に分類し,それらの文字を,悲しむべきことや,後が無い者に用いる文字であるとする。

右,十四の諡は,之を閔傷に用う・之を後無き者に用う(『通志』卷四十六・諡略第一・諡中)。

すると,「懷」字に,は「義に止まり,多くの善をもたらす」という意味を持ちつつ,「寿命を全うしない」の意味をもった諡字となる。

さらに,「諡法解」には「懷は,思なり」とあり,『逸周書補注』では,「義を執りて善を揚ぐるを懷と曰う」・「慈仁なるも短折するを懷と曰う」の意味を解釈しているという。

14) 晉の孔晁の「短は,未だ六十ならず。折は,未だ三十ならず」という注に対して,陳逢衡はつぎのように批判する。

補注:晉の穆侯瘍叔・宋公與夷 並びに「瘍」と諡す。『儀禮』喪服傳に「年十六より十九に至りて死するを長瘍と爲し,十二より十五に至るまでを中瘍と爲し,八歳より十一に至りて死するを下瘍と爲し,七歳より以下は無服の瘍と爲し,生まれて未だ三月ならざるは瘍を爲さず」と。『釋名』釋喪制に「未だ二十ならずして死するを瘍と曰う。瘍は傷なり。哀傷す可きなり」と。[陳逢]衡 [以下のように]案ず。前に「慈仁なるも短折するを懷と曰う」の孔注に「短は,未だ六十ならず。折は,未だ三十ならず」と。當に此の處の「六十」は當に「十六」に作るべし,「三十」は「十三」に作るべし。蓋し「長瘍」「中瘍」を謂うなり。若し年 未だ六十ならざれば,下壽を去ること遠からず。焉くんぞ短なるを得んや。『洪範』に「六極,一に曰く凶短折」と。「短」は上瘍と爲し,「折」は下瘍と爲す(『逸周書補注』卷十四・三十六葉・「短折不成曰瘍」条の補注)。

「短」が六十歳未満,「折」が三十歳未満では長すぎ,『儀禮』や『釋名』などの用例から考えると,文字をひっくりかえして十六歳・十三歳にするのがよい,というのである。

懷は、思なり。

補注：『爾雅』釋詁〔下〕に「懷は、思なり」と。此れ「義を執りて善を揚ぐるを懷と曰う」・「慈仁なるも短折するを懷と曰う」の義を釋するなり（『逸周書補注』卷十四・五十九葉）。では、「獻」はどうだろうか。「獻」字については、『史記』正義に引く「諡法解」では、
 聰明叡哲なるを獻と曰う（聰明叡哲曰獻） 通知の聰有り（有通知之聰）
 知^{うまれつき}質^{あつ}にして聖有るを獻と曰う（知質有聖曰獻） 通ずる所有りて蔽うこと無き（有所通而無蔽）
 とある。

『逸周書』諡法解では、

聰明叡哲なるを獻と曰う（聰明叡哲曰獻） 通知の聰有り（有通知之聰）

のみである。

陳逢衡は、『逸周書補注』で、次のように補注をつける。

聰明叡哲なるを獻と曰う（聰明叡哲曰獻）。『後漢書』孝獻皇帝に引くも同じ。『爾雅』釋言の郭注に「叡哲」を「睿智」に作る。『獨斷』同じ。『後漢書』桓帝懿獻梁皇后に注に引きて「哲」を「智」に作る。

孔〔晁〕注：通知の聰有り。

補注：魯の獻公具「獻」と諡す。『漢書』景十三王傳に、「河間王德立，二十六年にして薨ず。中尉の常麗以て聞するに，曰く，王は身^{なお}端く，行ないは治まり，温仁恭儉にして，篤く敬い下を愛し，明知にして深く察し，鰥寡を恵す，と。大行今（令）「諡法に曰く「聰明叡哲なるを獻と曰う（聰明叡哲曰獻）」と。宜しく諡して「獻王」と曰うべし，と奏す」と。師古曰く，獻は深なり，通なり，と（『逸周書補注』卷十四・十五葉・「聰明叡哲曰獻」条）。

また、朱右曾の『逸周書集訓校釋』六・諡法^{ママ}第五十四・「聰明叡哲曰獻・知質有聖曰獻」条では、『史記』正義に引く「諡法解」によって、「知質有聖曰獻」条を補っている。

「聰明叡哲」とは、視・聽・思の徳を具う。孔〔晁〕曰く、「知質有聖」は「通ずる所有りて蔽うこと無き」なり，と。「知質」句は、舊と脱す。「史記正義」に據りて補す（『逸周書集訓校釋』六・諡法^{ママ}第五十四・「聰明叡哲曰獻・知質有聖曰獻」条）。

こうした注釈からすると、「聰明叡哲曰獻」・「知質有聖曰獻」は、「聡明で明晰」・「知性が生まれつきですべてを理解している」などの意味かあるとする。

蘇洵の「諡法」では、つぎのようにいう。

獻二

聰明睿智なるを獻と曰う（聰明睿智曰獻）

獻は賢なり。

徳に嚮いて徳を内とするを獻と曰う（嚮徳内徳曰獻）

今文尚書に云爾。注家 皆な云う，嚮とは恵なり，徳とは元なり，と。其の義 當に通ずべからず。『書』を以て信と為す。劉熙 以て「獻とは軒軒然として物の上に在るの

稱なり」と爲す。内は亦た嚮なり。人能く日々徳に嚮う。恵は則ち衆の推仰する所と爲り。軒軒然として物の上に在り（「諡法」卷一・「獻二」条）。

蘇洵は、「獻」には、「聡明で明晰」である、「日々徳に向きあい徳を会得する」などの意味があるとするのである。

王世貞は、この皇太子見済の諡の「懷獻」について、

懷獻

太子皇太子見済。景泰。

右、慈仁短折、聰明睿智^①（『弇山堂別集』卷七十四・諡法五）。

①『易』繫辭傳上に「古之聰明叡知、神武而不殺者乎（古の聰明睿知 神武にして殺さざる者か）」。また、『中庸』に「唯天下之至聖、爲能聰明睿知、足以有臨也（唯だ天下の至聖のみ、能く聰明睿知にして、以て臨む有るに足ると爲すなり）」。

という。つまり「慈善仁愛の持ち主で若くして亡くなる」、「聡明で睿智の持ち主」という意味を持っていたとする。

また、管見の及ぶところ「懷獻」と諡されたのは、五代十国の南唐の後主の李煜の第二子の李仲宣に贈られたものがある。

是月（乾德二年〔九六四〕十月）^①、唐の宣城公仲宣 卒す。岐王に封ぜられ、「懷獻」と諡す。仲宣 早に慧にして、昭惠后周氏 甚だ之を愛す。傷悲するに因りて疾を得。〔乾德二年〔九六四〕〕十一月、昭惠后〔周氏〕 殂す（『續資治通鑑長編』卷五・太祖・乾德二年・「冬十月」条）。

①宋・徐鉉の『騎省集』卷十七・「岐王墓誌銘」によれば、十月二日に亡くなったとする。

宋・馬令の『馬氏南唐書』によれば、李仲宣は四歳で亡くなっている。

宣城公の仲宣、後主の子なり。小字は瑞保なり……乾德二年（九六四）卒す。年四歳なり。始め宣城公に封ぜられる。〔そして〕岐王と追贈され、「懷獻」諡さる（『馬氏南唐書』卷七・宗室傳第二）。

また、景泰帝の皇太子に贈られたものより後になるが、生まれて五日で亡くなった獻帝（世宗嘉靖帝の父）の長子の厚熙も「懷獻」と諡されている。

獻帝に長子厚熙有り。生まれて五日にして^{わかじに}殤す。嘉靖四年、岳王を贈られ、「懷獻」と諡さる（『明史』卷一百十五・列傳第三・「睿宗獻皇帝」）。

このように、意味や用例からすると、「懷獻」というのは、若くして亡くなったという事実関係を述べた諡号であつたと考えられる。

なお、『御撰資治通鑑綱目三編』（二十卷本）によると、皇太子の変更は、つぎのように記される。

夏五月、帝 故皇太子の見深を廢して沂王と爲し、子の見済を立てて皇太子と爲す（夏五月、帝廢故皇太子見深爲沂王、立子見済爲皇太子）。

初め帝 卽位し、易儲せんと欲す。而るに發するに難しとし、遲回し之を久しくす。太監の王誠・舒良 帝の爲に謀り、先ず陳循・高穀に百金を賜い、江淵・王一寧・蕭鑑・商輅は之を半にし、以て其の口を緘^とざさす。然れども猶お未だ廢せざるなり。會たま廣西土官の黃玪 私怨を以て其の弟の思明知府の〔黃〕珣^{そこな}を戕^こい、其の家を滅す。〔黃〕玪 罪を懼れ、使を遣りて京師に走かせ上疏し、帝に密かに大計を定め、東宮を易建し、以て中外の心を一にし、覬覦（分を越えた希望）の望みを絶たんことを請う。帝 廷臣に下し會議さすも、相い顧みて敢えて言うもの莫し。司禮太監の興安 聲を厲しくして曰く、此の事 已む可からず。卽ち以て不可と爲せば、署名すること勿れ。兩端を持つること無し、と。羣臣 皆な唯唯として署議（署名）し、奏上す。報じて可とす。卽日、東宮官を簡置し、故太子を廢して沂王と爲し、見濟を立てて太子と爲す。天下に大赦す。百官に詔して朔望（毎月の一と十五日）に太子に朝せしむ（『御撰資治通鑑綱目三編』（二十卷本）卷七・十葉～十一葉・明景帝景泰三年）。

「資治通鑑綱目凡例」の「廢黜」についての凡例を見ると、

凡ての正統の其の後・太子・諸侯王を廢するに、以て其の罪の實を考うる無き者は、「某人 廢さる」と曰う（凡正統、廢其后・太子・諸侯王、而無以考其罪之實者、曰某人廢）。

漢の彭越・陳後の類の如し（如漢彭越・陳后之類）。

罪狀の明白なる者は、「有罪」の字を加う（罪狀明白者、加有罪字）。

罪の已に見わるる者は、「罪を以て」と云う。反逆の大罪 已に見わるるが若きは、則ち必ずしも加えず（罪已見者、云以罪。若反逆大罪已見、則不必加）。

罪無きは、「某人を廢す」と曰う（無罪、曰廢某人）。

漢の景帝の薄后・太子榮を廢すの類の如し（如漢景帝廢薄后・太子榮之類^①）（凡例・二十八葉）。

①『資治通鑑綱目』（卷四・「辛卯（前一五〇年）」条）に「辛卯（前一五〇年）七年、冬十一月、廢太子榮爲臨江王」。

とある。

このように、『資治通鑑綱目』的な正統観から見ると、英宗の長子見深は、「罪無く（無罪）」して皇太子の地位を廢された、と清政権は判断していたといえる。

（つづく）